諫早市文化財調査報告書　第21集

貝津横島B遺跡

2008

諫早市教育委員会

発刊にあたって

長崎県の中央部に位置する諫早市は、古代官道の「船越駅」の所在が想定され、近世においては「長崎街道」が整備されるなど、交通の要衝としての地理的な特性を活かし、その歴史を刻んできました。

本市のその特性をさらに活かすべく、このたび新たな流通の拠点として「諫早流通産業団地」が計画されましたが、事業計画地に「貝津横島Ｂ遺跡」の所在が想定されたため、当教育委員会におきまして平成16年度に範囲確認調査、平成18年度に本調査を実施しました。

調査の結果、旧石器～縄文・弥生時代の長期にわたる先人の生活の痕跡が確認され、本市の歴史解明に新たな資料を提起することとなりました。

詳細については本書記載のとおりですが、今回得られました資料が本書とともに、今後の地域の歴史研究の一助として活用されるだけでなく、文化財保護への理解を深める契機となることを切に願う次第であります。

発刊にあたり、現地での発掘調査及び整理作業に従事していただきました皆様をはじめ、関係各位に賜りました深い御理解と多大なる御協力に対しまして、心より厚くお礼申し上げます。

平成20年3月31日

諫早市教育委員会
教育長　峰松　終止

例　　言

1．本書は貝津横島Ｂ遺跡（長崎県諫早市貝津町）の発掘調査報告書である。

2．調査は諫早市土地開発公社の依頼を受けて、下記の期間で諫早市教育委員会が実施した。

範囲確認調査（平成16年度）平成16年９月14日～10月18日

本　調　査（平成18年度）平成18年11月２日～平成19年１月15日

（中断11月14日～12月11日）

報告書作製（平成19年度）平成19年６月１日～平成20年３月31日

3．調査主体者及び調査担当者は以下の通りである。

調査主体　諫早市教育委員会

教育長　峰松　終止

教育次長　田鶴　俊明（平成16年度）

平野　博（平成18年度）

下田　正明（平成19年度）

平古場　豊（平成19年度）

文化課長　松本　玉記

課長補佐　川内　順史（平成16・18年度）

船岡　秀海（平成19年度）

参　事　秀島　貞康

主　任　川瀬　雄一

（調査、整理作業担当）

4．遺構及び土層の実測、現地での写真撮影、遺物の実測・写真撮影は調査担当者が行った。

5．調査及び整理作業にかかる図面・写真類は諫早市教育委員会が管理し、諫早市郷土館で保管している。

6．図中の方位は磁北を示し、高度は標高値である。

7．トレンチ名については、特に記載がない場合はすべて本調査の際の呼称である。

8．自然科学分析は㈱古環境研究所に委託した。

9．本書の執筆・編集は川瀬が行った。

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 2
第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 4
　第１節　範囲確認調査 …… 4
　第２節　本調査 …… 4
　第３節　層　位 …… 6
第Ⅲ章　調査の記録 …… 8
　第１節　遺　構 …… 8
　　１．石　列　① …… 8
　　２．石　列　② …… 8
　　３．土　壙 …… 8
　第２節　遺　物 …… 12
　　１．土　器 …… 18
　　２．石　器 …… 18
　　３．陶磁器 …… 26
第Ⅳ章　まとめ …… 29
　附　編 …… 33

挿　図　目　次

第１図　諫早市位置図 …… 1
第２図　周辺地形図（昭和26年・Ｓ－１／25,000） …… 3
第３図　周辺遺跡分布図（Ｓ－１／25,000） …… 3
第４図　調査位置図（Ｓ－１／5,000） …… 5
第５図　トレンチ配置図（Ｓ－１／400） …… 5
第６図　土層図（Ｓ－１／70） …… 7
第７図　石列①実測図（Ｓ－１／35） …… 9
第８図　石列②実測図（Ｓ－１／25） …… 10
第９図　土壙実測図（Ｓ－１／20） …… 11
第10図　遺物分布図（範囲確認調査１・２Ｔ）（Ｓ－１／50） …… 13
第11図　遺物分布図（範囲確認調査３～５Ｔ）（Ｓ－１／50） …… 14
第12図　遺物分布図（本調査１・２Ｔ）（Ｓ－１／50） …… 15

第13図　遺物分布図（本調査３・４Ｔ）（Ｓ－１／50）…… 16
第14図　遺物分布図（本調査５Ｔ）（Ｓ－１／50）…… 17
第15図　土器実測図（Ｓ－１／３）…… 19
第16図　石器実測図①（Ｓ－２／３）…… 21
第17図　石器実測図②（Ｓ－２／３）…… 23
第18図　石器実測図③（Ｓ－２／３）…… 24
第19図　石器実測図④（Ｓ－１／２）…… 25
第20図　陶磁器実測図（Ｓ－１／３）…… 27

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表 …… 3
第２表　トレンチ名対照表 …… 6
第３表　トレンチ別遺物集計表 …… 12
第４表　石器組成一覧表（石材別）…… 18
第５表　石器組成一覧表（器種別）…… 20
第６表　土器観察表 …… 27
第７表　石器観察表 …… 28
第８表　陶磁器観察表 …… 29

図　版　目　次

図　版１　調査地周辺航空写真・調査地遠景・調査地近景 …… 51
図　版２　調査地近景・１Ｔ地山検出状況・１Ｔ東壁 …… 52
図　版３　２Ｔ石列①・２Ｔ石列①・４Ｔ検出状況 …… 53
図　版４　３Ｔ検出状況・遺物出土状況①（１Ｔ）・遺物出土状況②（２Ｔ）…… 54
図　版５　調査地近景・調査地近景・調査地近景 …… 55
図　版６　１Ｔ東壁・３層検出状況①・３層検出状況② …… 56
図　版７　遺物出土状況（４Ｔ）・５Ｔ石列①・５Ｔ石列①…… 57
図　版８　５Ｔ石列①・３Ｔ石列②・２Ｔ土壙 …… 58
図　版９　１・２Ｔ東壁・５Ｔ東壁・作業状況 …… 59
図　版10　出土遺物① …… 60
図　版11　出土遺物② …… 61
図　版12　出土遺物③ …… 62

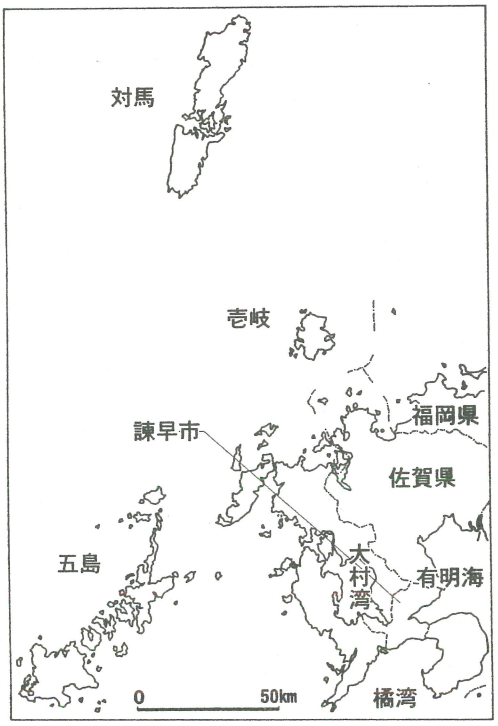
※図版１～４は範囲確認調査時、図版５～９は本調査時のものである。

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

諫早市は、長崎県本土部のほぼ中央に位置し、「県央地域」とも言われ、東に有明海、西に大村湾、南に橘湾の三方を海に囲まれた地峡部にある。長崎半島、西彼杵半島、島原半島の結節部にあたり、古代官道の「船越駅」の存在が想定され、近世に入ってからは長崎街道やこれに伴う宿場が整備されるなど、古くから交通の要衝としての重要な役割を果たして発展してきた。

また、国道34号線（長崎～鳥栖）・57号線（長崎～島原～大分）・207号線（時津～小長井～佐賀）・251号線（諫早～国見～加津佐～長崎）の国道各線及び長崎自動車道（高速道路）、さらにＪＲ長崎本線・大村線、島原鉄道が諫早駅で交差するなど、現在においても交通の要衝となっている。



第１図　諫早市位置図

平成17年３月１日には、諫早市、西彼杵郡多良見町、北高来郡森山町、飯盛町、高来町、小長井町の１市５町での合併により新たに「諫早市」となった。面積は312.20㎢、人口は144,231人（平成20年２月末現在）で、長崎市・佐世保市についで県内３位となっている。

現在の市域は、古代の律令制下では高来郡（一部は彼杵郡）に属し、鎌倉時代の『八幡宇佐神宮大鏡』に「伊佐早村」として初出、南北朝期の争乱を経て、西郷氏が統治した。天正15(1587)年に筑後柳河の龍造寺氏が攻め入り、姓を「諫早」と改め、諫早家は佐賀藩の「御親類同格」の「佐賀藩諫早領」として藩政の一翼を担った。

諫早市域の地形は、大別して、北部を占める多良火山系の五家原岳（1058ｍ）を頂点とした火山山麓地域、南部を占める古第三紀層、溶岩円頂丘、そして溶岩台地からなる標高300ｍ以下の丘陵地域、そして両地域に挟まれた平野及び両地域内に介在する低地地域に分けられる。

市の中央部を流れる本明川は、五家原岳を源流とし、市街地を通って有明海に注ぎ、下流にある諫早平野は県下最大の穀倉地帯となっているが、この平野は中世以降の干拓によって形成されたものである。

今回調査を行った貝津横島Ｂ遺跡は、大村湾の最南端、諫早市貝津町に所在する。貝津町は大村湾に注ぐ東大川と西大川の流域にある。北部の横島にはかつては付近第一の海水浴場があった。東大川流域には水田が広がり、南部は丘陵地であったが、この一部に昭和36年長崎県総合農林センターが移転開設、翌37年には県内初の工業団地である県金属工業共同組合の貝津

工場団地が着工するなど次第に開発が始まった。また、昭和52年には地域整備公団による諫早中核工業団地の造成が開始され、昭和60年に完成、半導体・コンピューター・航空機器・宇宙産業機器などの企業が進出し、県内の交通・工業の拠点として発展、現在では長崎に次いで県内２位の工業出荷額をあげている。

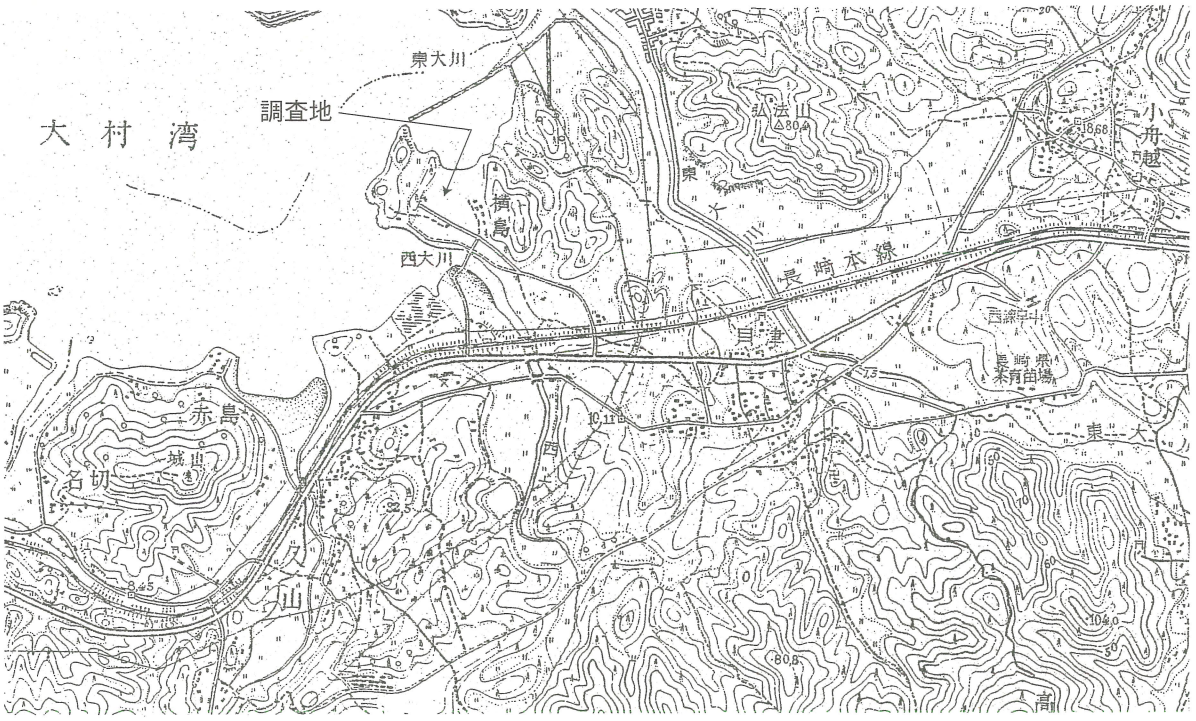
第２節　歴史的環境

周辺遺跡の立地は、南側丘陵の標高40ｍ以下に集中する。標高10～20ｍには雀ノ倉遺跡、牛込Ａ・Ｂ遺跡が、標高20～30ｍには西輪久道（にしわくどう）遺跡、鷹野遺跡、平遺跡などが立地している。これらは西大川流域にある旧石器～縄文時代の複合遺跡群で、いずれも金属工業団地、中核工業団地造成、九州横断自動車道の建設に伴って発掘調査がなされた。縄文時代の遺跡では前期の低湿地遺跡である浜田遺跡が知られている。弥生～古墳時代の遺跡としては貝津横島Ａ遺跡があり、長さ５尺、幅３尺の箱式石棺墓11基、長さ３尺、幅１尺の小型の箱式石棺墓３基が発見されたという（註１）。滑川（なめりかわ）遺跡では平成17～18年の調査において弥生時代中期初頭の箱式石棺墓４基と甕棺墓２基が確認された（註２）。

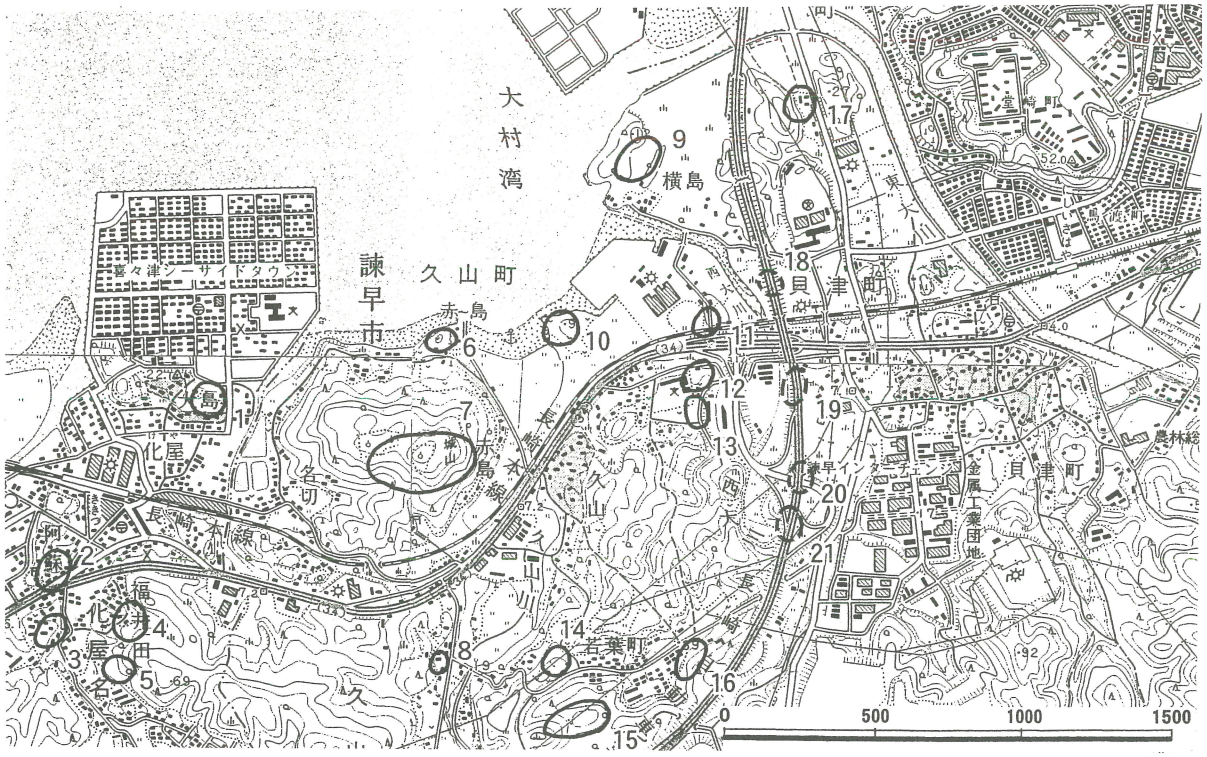
中世では、長牟田城跡・久山城跡などが知られている。近世では西大川の右岸河口付近、現在の竜宮橋付近に塩田があり、寛文（1661～1672年）頃には製塩業が盛んであった。約10町歩の塩田があり、隣接する津水には塩問屋が７軒もあり、できた塩はすべて馬で津水まで運ばれたという。しかし、製塩は明治42年頃に終わった。西大川の河口に「塩大神王」と記された塩神様が祀られていたが、現在は龍宮橋のところに移されている（註３）。また、町内を「長崎街道」が通過しており、沿線には殿様行列の馬が一息入れて水を飲んだ「お馬の水」や「籠立場跡」・「旧茶屋」などの街道にちなんだ史跡がある。ちなみに、この茶屋は「焼餅」が有名であったという。

昭和に入り、昭和21年には「横島海水浴場」が市営となり、休憩場が整備され、家族連れで大変な活況を呈した。一般の海水浴客のほかに、中等学校の水泳訓練や各種団体の夏季訓練に利用され、潮が引くとハマグリやアサリがとれ、地引網で賑わった。海有り砂浜あり、緑陰あり、広場ありで大村湾奥の別天地であったという。しかし近隣の開発により次第に海水の汚染が進み、昭和40年後半になると人影もなくなった。その後工業団地などの開発が相次いだことについては、第１節後半のとおりである。

今回の調査地について、流通産業団地に伴う用地買収前の土地所有者に尋ねたところ、「周辺一帯はアシやヨシが生えた湿地であった。調査が行われた土地は畑として耕作をしており、さつまいも・さといもを作っていたが海水の流入がひどい時には作物がだめになった。土地の東側で土砂の埋立てが行われるようになると、周辺がしだいに嵩上げされ、当時の湿地の状況が残っているのはここだけとなった。埋立ての影響か、水に影響が出て、約20年前に耕作を放棄した。」とのことであった。



第２図　周辺地形図（昭和26年・Ｓ－１／25,000）



第３図　周辺遺跡分布図（Ｓ－１／25,000）

番号	名　称	種　別	立　地	時　代	番号	名　称	種　別	立　地	時　代
1	化屋Ｂ遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文	11	貝津横島Ａ遺跡	墳墓	丘　陵	弥生・古墳
2	上阿蘇遺跡	墳墓	台　地	弥生	12	東大久保遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文
3	阿蘇前遺跡	遺物包含地	平　地	縄文	13	柿崎遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文
4	野副遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文	14	笹原遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文
5	合戦場遺跡	遺物包含地	山　裾	旧石器・縄文	15	長牟田遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文・中世
6	赤島遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文	16	西輪久道遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文・中世
7	久山城跡	城跡	丘　陵	中世	17	西佐竹遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文
8	久山古墳	古墳	丘　陵	古墳	18	浜田遺跡	遺物包含地	平　野	旧石器・縄文
9	**貝津横島Ｂ遺跡**	**遺物包含地**	**丘　陵**	**縄文**	19	雀の倉遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文
10	滑川遺跡	墳墓・遺物包含地	丘　陵	縄文～古墳	20	牛込Ａ遺跡	遺物包含地	丘　陵	旧石器・縄文
					21	岩下遺跡	遺物包含地	丘　陵	縄文・近世

第１表　周辺遺跡地名表

註１　諫早市役所　『諫早市史　第１巻』　1955

註２　諫早市教育委員会　『諫早市文化財調査年報Ⅰ』諫早市文化財調査報告書第20集　2007

註３　諫早市教育委員会　『真津山史話』1984

第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　範囲確認調査

「地理的環境」の項目で記したとおり、今回の調査地付近は高速道路へのアクセスに適していることから、諫早市土地開発公社を事業主体とする「諫早流通産業団地」（分譲面積約8.5ha）が計画され、開発計画事前審査申出書が県知事あてで提出された。平成16年７月16日に市内部での関係部署による審査会が実施されたが、この際に、今回の計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「貝津横島Ｂ遺跡」に隣接することから範囲確認調査を要するとの回答を行った。

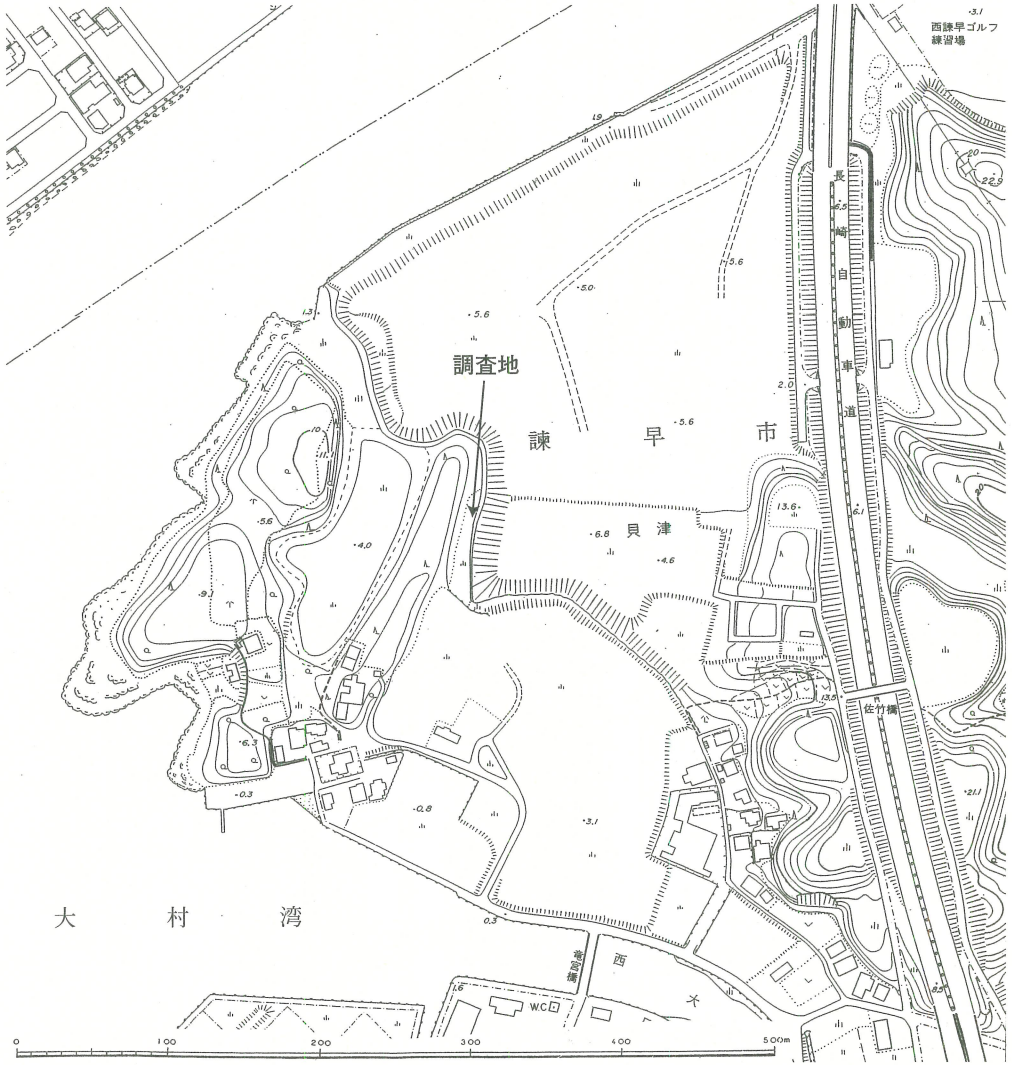
その後、調査の実施時期などに関する協議を行い、平成16年９月14日～10月18日の期間で範囲確認調査を行った。なお、開発計画に伴う範囲確認調査であるため、調査費用については国庫補助事業として行った。

調査は５箇所のトレンチを設定し、合計56㎡について実施した。この結果、砂岩の岩盤上にある遺跡であることが判明し、３・４Ｔでは遺物の分布が希薄であるものの、１・２・５Ｔにおいては、縄文時代前期の曽畑式土器や弥生時代中期の土器が出土しており、この範囲については本調査が必要と判断した。

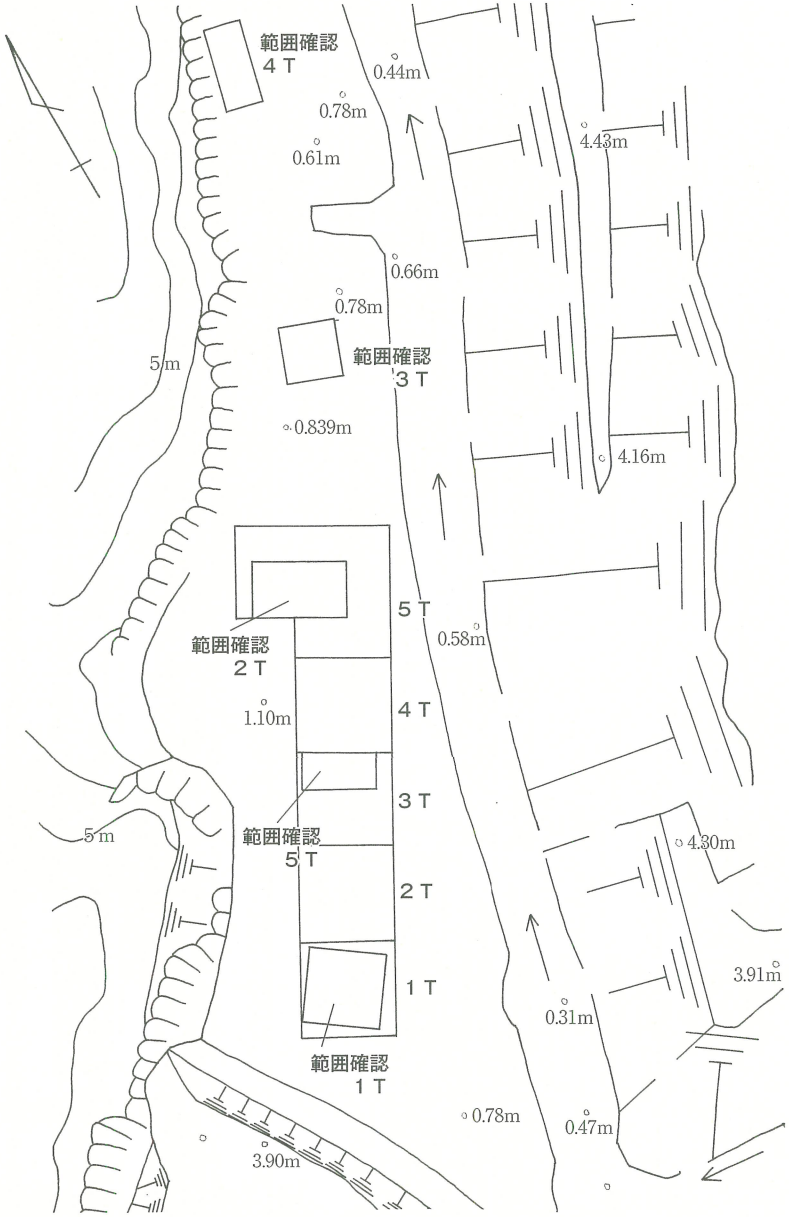
第２節　本調査

範囲確認調査を平成16年度に行ったが、事業の実施が数年先の計画であったこともあり、事業主体者との協議の結果、本調査は平成18年度に実施し、平成19年度に報告書の作製を行うとの結論に至った。なお、調査費用に関しては開発計画に伴う本調査であるため、事業主体者の負担で行った。

本調査は平成18年11月２日～平成19年１月15日（中断11月14日～12月11日）の期間で行った。トレンチは５×５ｍを基本として設定した。範囲確認調査を含めた調査面積は150㎡である。調査は、範囲確認調査で遺物の出土が顕著であった１・２・５Ｔ設定箇所を取り込むように設定し、新たに南側から１～５Ｔとした。表土（１・２層）以下の遺物の取り上げはＳ－１／10の縮尺でドットマップを作成した。低湿地という遺跡の立地上、定期的にポンプによる排水を行いながらの作業となり、遺物の取り上げだけでなく、調査そのものも困難なものであった。記録写真は、35㎜の白黒・リバーサルフィルムで行い、35㎜カラーフィルムを適宜使用した。



第４図　調査位置図（S－１／5,000）



第５図　トレンチ配置図（S－１／400）

なお、トレンチ名の対照関係は下記のとおりである。

範囲確認調査		本調査
１Ｔ	→	１Ｔ
２Ｔ	→	５Ｔ
５Ｔ	→	３Ｔ

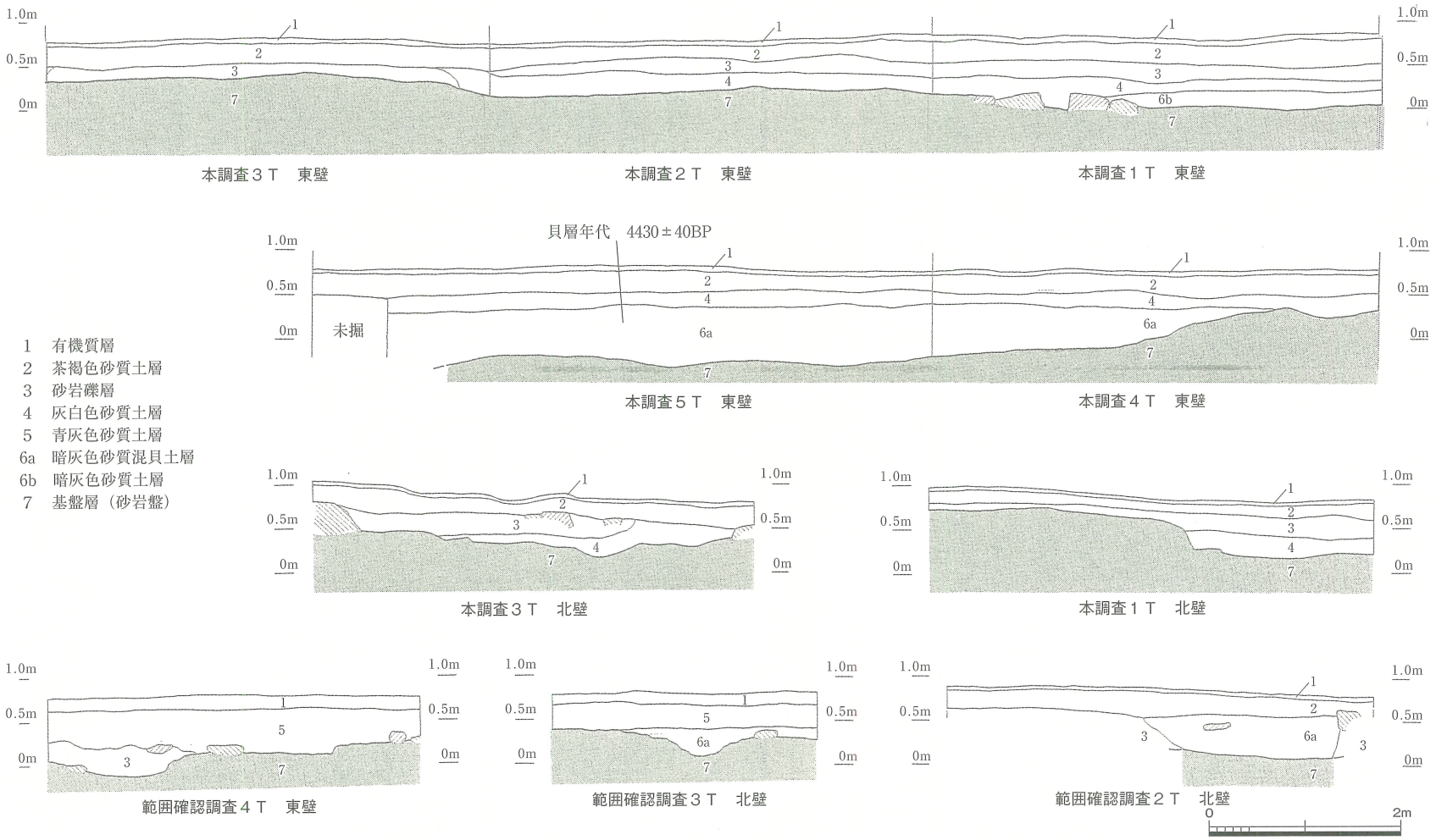
第２表　トレンチ名対照表

第３節　層　　位

現在の地表面は標高0.8ｍほどで、北側へ向かってわずかに傾斜している。

調査区内の層位は下記の通りである（第６図）。

１層　有機質層	黒褐色を呈する。厚さ５～７㎝で、腐植土状にブヨブヨとしておりアシ（ヨシ）の根を多く含む。
２層　茶褐色砂質土層	しまりのある砂質土。旧耕作土。
３層　砂岩礫層	砂岩の礫を密に含む層。上面で標高 0.5ｍを測る。層厚は20㎝程度。１Ｔ～２Ｔにかけては15～20㎝の円礫が多いが、３Ｔでは30～40㎝の板状石が多い。５Ｔの石列の東側がこの層の分布の東限となっており、４Ｔ以北の東壁には見られない。全体的な色調はオレンジ色であるが、礫間には４層の灰白色砂質土を含む。遺物を多く含む層である。
４層　灰白色砂質土層	水分を多量に含む層である。遺物を多く含む。
５層　青灰色砂質土層	範囲確認調査３・４Ｔのみで見られる層。無遺物層。
６ａ層　暗灰色砂質混貝土層	５層よりも色調が暗く、ひと抱え大の岩を含む。水分を多く含む。木質遺物や貝殻を含み、この貝層（自然堆積）の年代は、分析の結果、4430±40ＢＰの値を得た。４・５Ｔの東側で見られる。
６ｂ層　暗灰色砂質土層	６ａ層の貝を含まない層。１Ｔのみで見られる。
７層　基盤層（砂岩盤）	東側及び北側に向かって傾斜する。東側へは１・２Ｔでは急激に落ち込み、３～５Ｔでは緩やかに傾斜している。３・４Ｔでは東側に落ち込んだあとに再び上昇する。北側へは４Ｔから緩やかに傾斜し、調査区内での最深部では－0.2ｍを測る。



1　有機質層
2　茶褐色砂質土層
3　砂岩礫層
4　灰白色砂質土層
5　青灰色砂質土層
6a　暗灰色砂質混貝土層
6b　暗灰色砂質土層
7　基盤層（砂岩盤）

第６図　土層図（S－1／70）

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　遺　　構

１．石　　列①（第７図、図版３・７・８）

範囲確認調査２Ｔで部分的に検出され、本調査５Ｔで全体を検出した。

調査区全体を見ると３層の砂岩礫層は円礫がほとんどであるが、この層の上部に、縦横50㎝程度、厚さ10㎝ほどの円礫ではない砂岩板状石の平坦面を上に向け、南北方向に２列に並べている。途中欠落している箇所もあるが、列それぞれはほぼ直線に並べられており、距離は東側列で６ｍ、西側列が４ｍである。列どうしの間隔は北側で約３ｍ、南側で約1.8ｍと南側に向かってすぼまっている。レベルは標高0.5ｍ付近にあり、ほぼ水平であるが、西側列が0.5ｍより高位に、東側列が0.5ｍより低位にあり、東側にやや下がっている。

調査区全体での３層の砂岩礫層の分布範囲は、この東側列のラインを南側に伸ばした範囲に限られており、４・５Ｔの東壁にはかからない。

石列どうしの間には青灰色砂質土が堆積しており、かつて水の流れがあったことを示している。時期としては明治以降と思われる。

２．石　　列②（第８図、図版８）

３Ｔの南端において検出された。

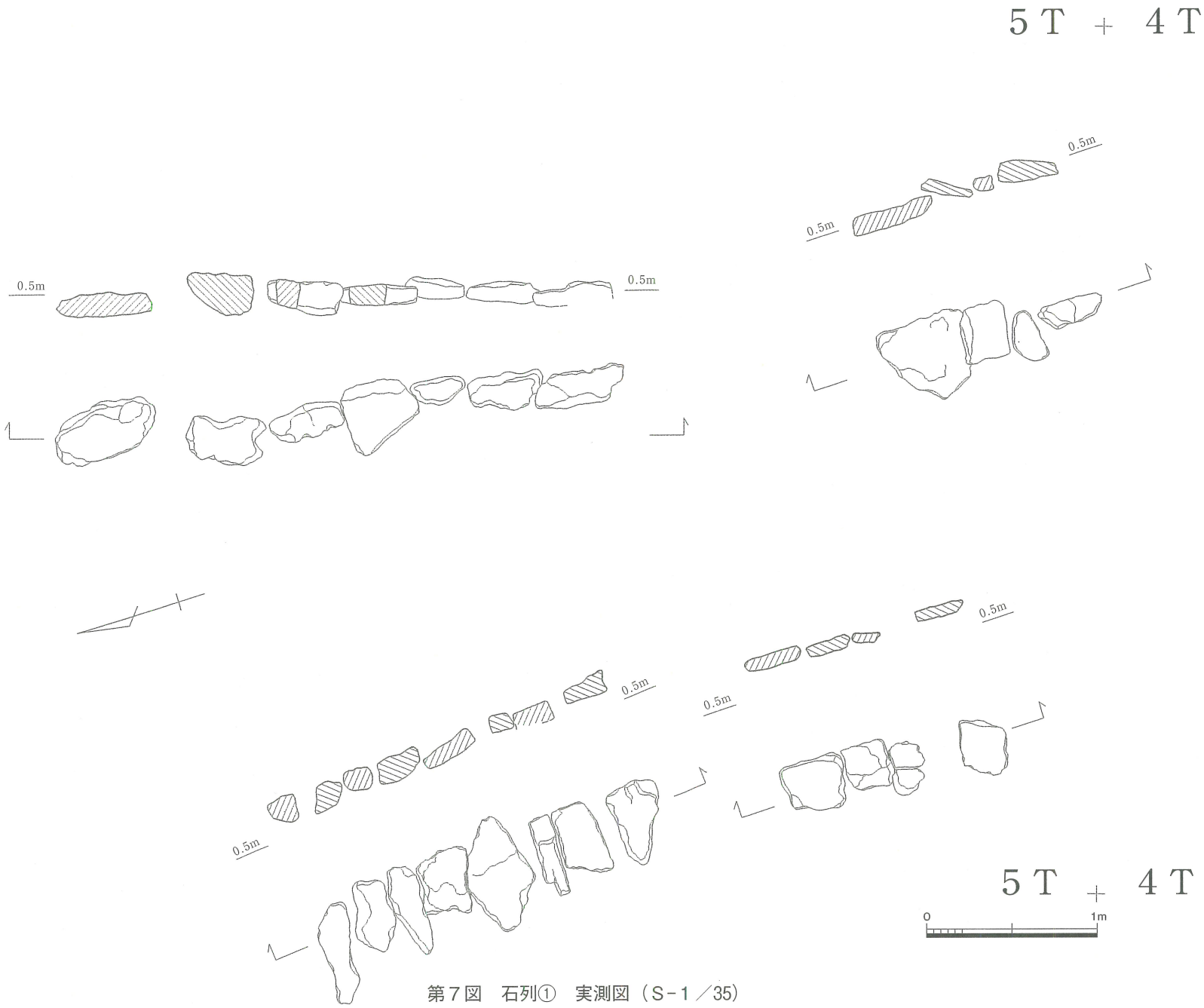
２列の石が20～30㎝の間隔でほぼ東西方向に約５ｍの長さで並んでいる。石材は安山岩である。北側列に石材の欠落が認められる。立石がある西側から約２ｍの部分は調査前の時点ですでに地表面に露出していた。３層の砂岩礫層の上面に載るような状態で、東側に向かって傾斜している。高低差は20㎝ほどである。西側で板状石を立てているが、東側には板状石はなく塊石を並べている。傾斜の低い方は、水路となっており、排水用の溝として使用されたと考えられる。時期としては明治以降と思われる。

３．土　　壙（第９図、図版８）

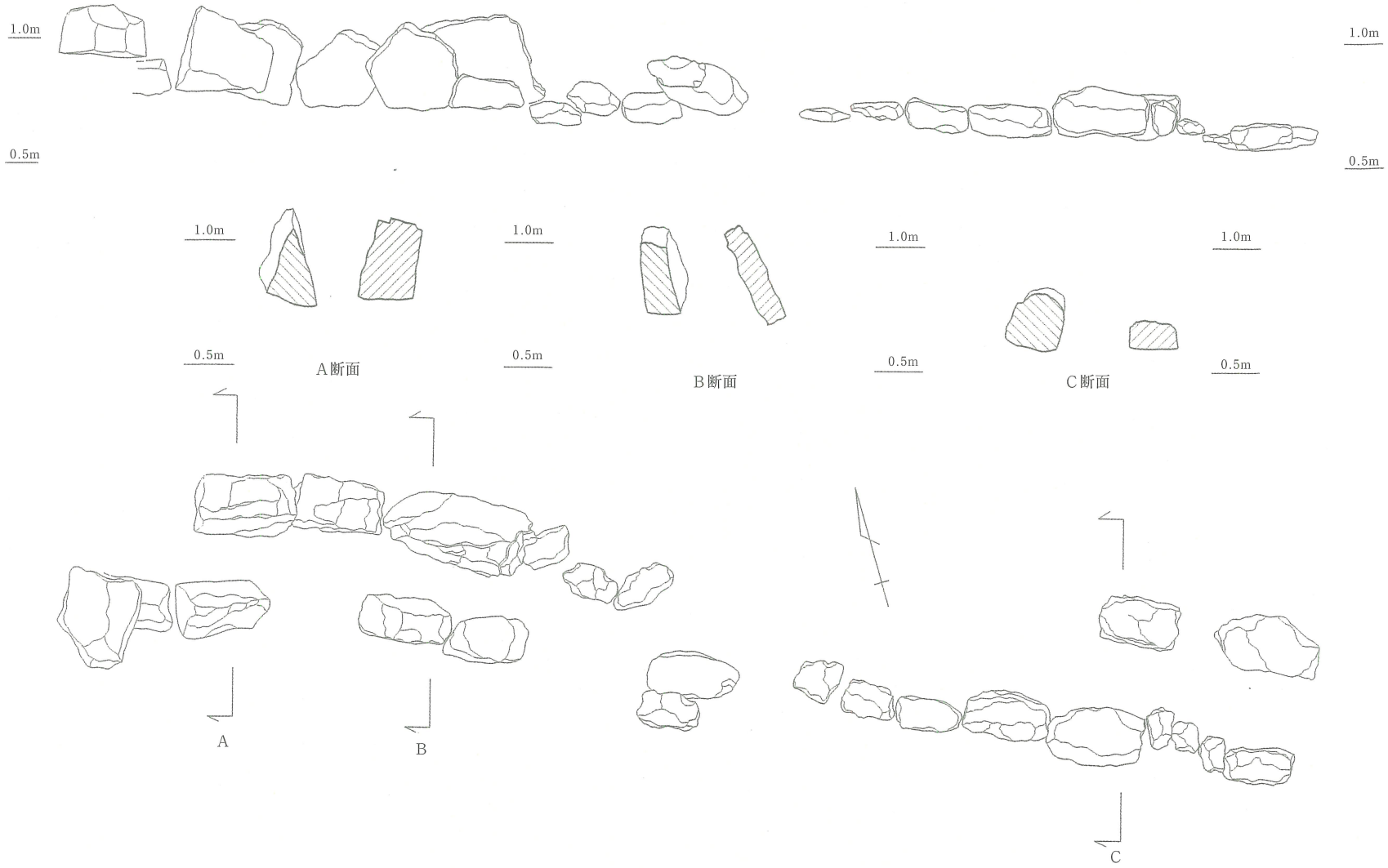
２Ｔにおいて検出された。

砂岩盤に掘り込まれており、掘削面の長軸115㎝、短軸80㎝、底部の長軸135㎝、短軸90㎝、深さ55㎝を測る。平面形は隅丸長方形で、断面形は底部が広く、フラスコ状を呈する。

貯蔵穴の可能性もあるが、内部には土器片や石器がわずかに含まれる程度で自然遺物は含まれない。また瓦片や明治期の磁器片などが混入しており、これらは土壙の埋没時期を示していると思われる。



第７図　石列①　実測図（S－１／35）

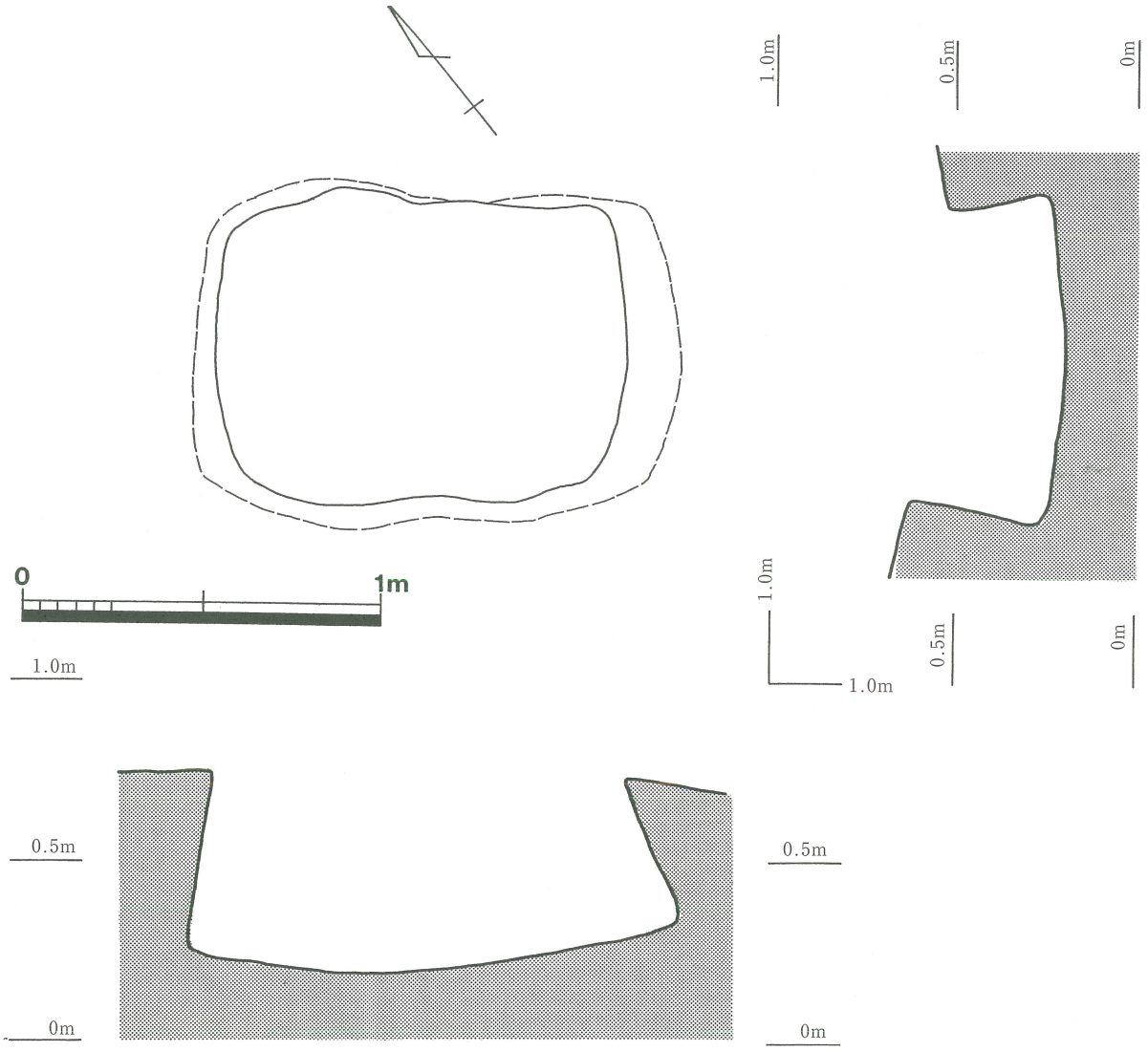


3T
2T

0 1m

3T
2T

第８図　石列②　実測図（S－1／25）



第９図　土壙実測図（S－1／20）

第２節　遺　　物

今回の調査では総数1,070点が出土した（第３表）。このうちの約68％が石器類で、次に土器が約16％を占める。内容は、ナイフ形石器や細石刃といった旧石器時代の遺物、縄文時代前期・弥生時代中期の土器、近世の陶磁器、獣骨などで遺物の時期幅は大きい。

遺物に関しては範囲確認調査・本調査ともにドットマップで取り上げを行った。分布状況については第10～14図のとおりであるが、平面では調査区北側の４・５Ｔで多出する傾向があり、３Ｔでは極端に少ない。１・２Ｔではトレンチの東側に偏り、４・５Ｔでは全面で出土する。断面では大半が３層の砂岩礫層がある標高0.5ｍ付近に分布している。範囲確認調査３・４Ｔでは標高0.5ｍ以下で出土する。

やや離れた箇所のものが接合すること、土器にローリングが見られること、層位的には遺物の時期の逆転も見られることから、層位的な堆積状況にはなく、土砂の流入等の結果として堆積したものと考えられる。

範囲確認調査

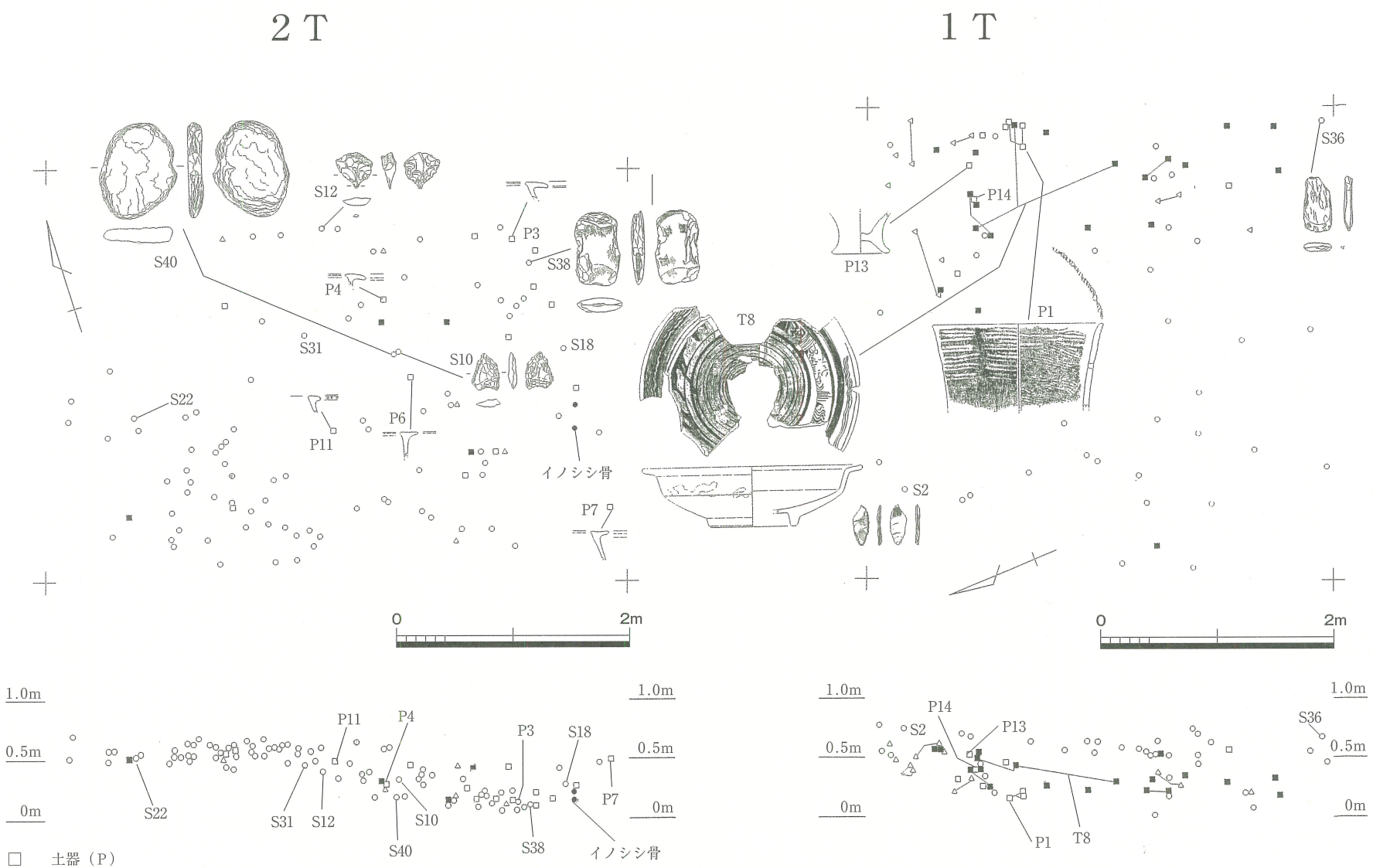
トレンチ	土器	石器	陶器	磁器	動物骨	木質遺物	ガラス	計
1	15	64	21	14				114
2	16	121	4	5	2			148
3	4	31	4			1		40
4	3	13	1	1		2		20
5		12	1	1				14
合計	38	241	31	21	2	3	0	336

本調査

トレンチ	土器	石器	陶器	磁器	動物骨	木質遺物	ガラス	瓦	計
1	2	11	8	3		1			25
2	23	108	7	4					142
3	9	20	25	8			2	5	69
4	25	153	17	6					201
5	71	197	15	11	1	2			297
合計	130	489	72	32	1	3	2	5	734

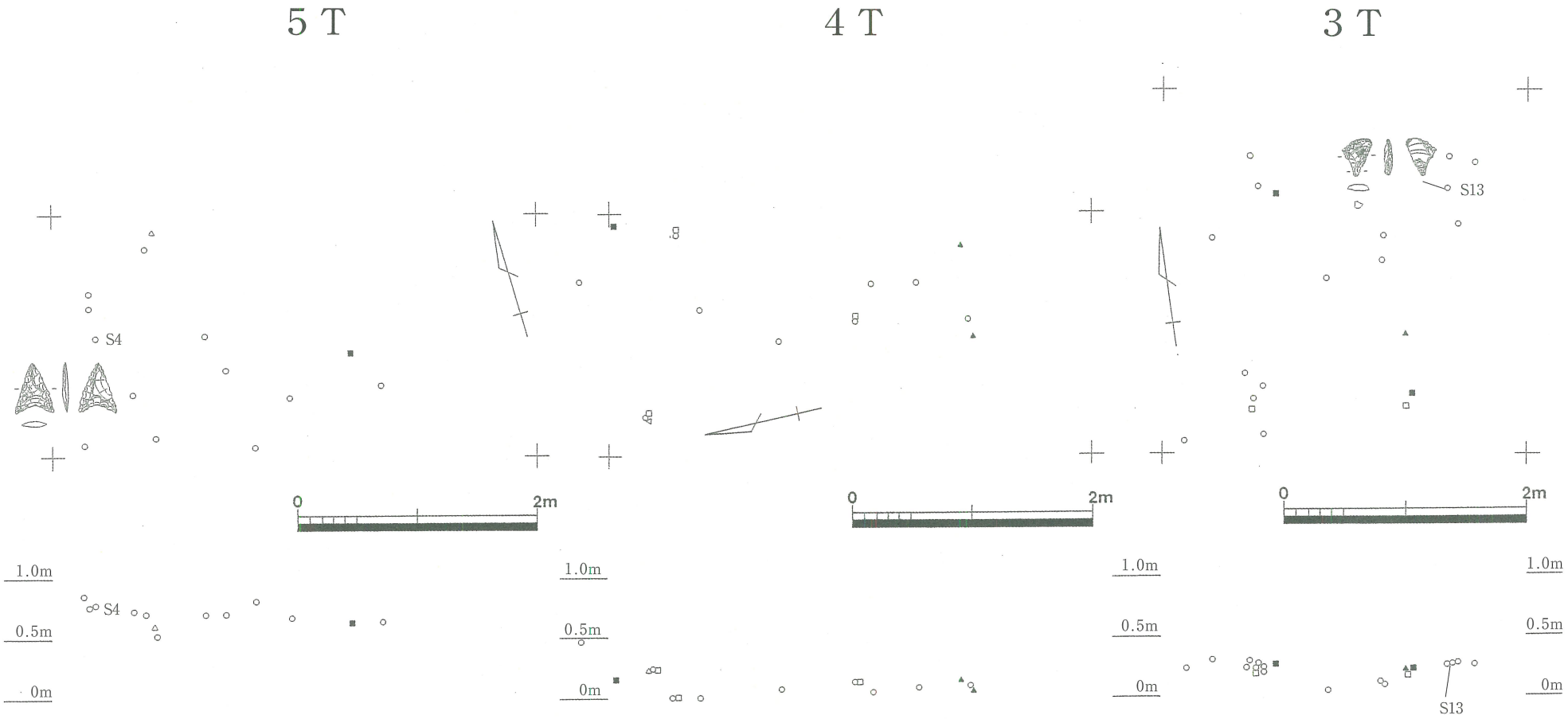
	トレンチ	土器	石器	陶器	磁器	動物骨	木質遺物	ガラス	瓦	計	備考
本調査	1	17	75	29	17		1			139	範囲確認調査1Tを含む
本調査	2	23	108	7	4					142	
本調査	3	9	32	26	9			2	5	83	範囲確認調査5Tを含む
本調査	4	25	153	17	6					201	
本調査	5	87	318	19	16	3	2			445	範囲確認調査2Tを含む
範囲確認調査	3	4	31	4			1			40	
範囲確認調査	4	3	13	1	1		2			20	
合計		168	730	103	53	3	6	2	5	1,070	
割　合		0.157	0.682	0.096	0.050	0.003	0.006	0.002	0.005	1.000	

第３表　トレンチ別遺物集計表



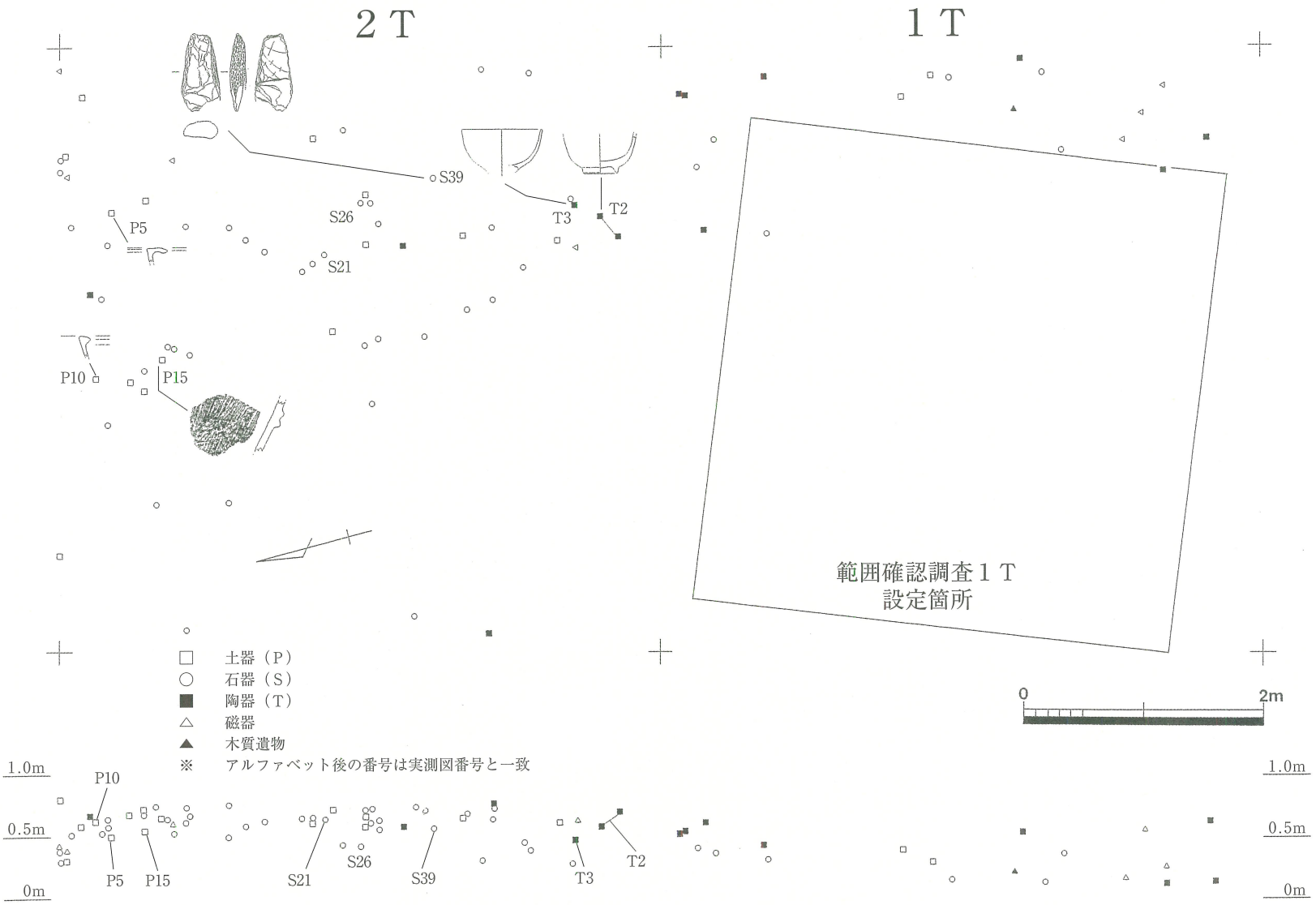
□ 土器（P）
○ 石器（S）
■ 陶器（T）
△ 磁器
● 獣骨
※ アルファベット後の番号は実測図番号と一致

第10図　遺物分布図（範囲確認調査１・２Ｔ）（Ｓ－１／50）

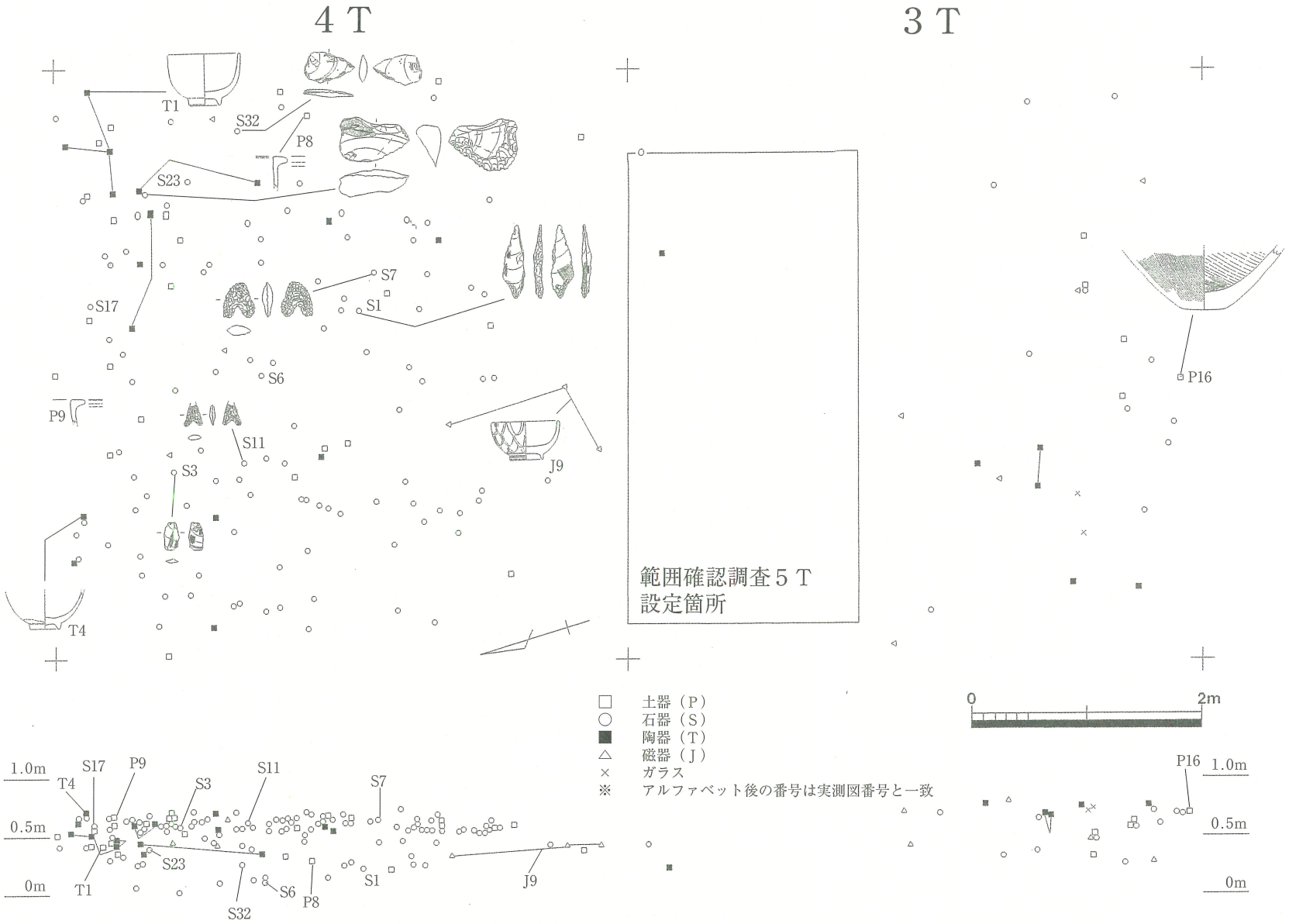


□ 土器
○ 石器（S）
■ 陶器
△ 磁器
▲ 木質遺物
※ アルファベット後の番号は実測図番号と一致

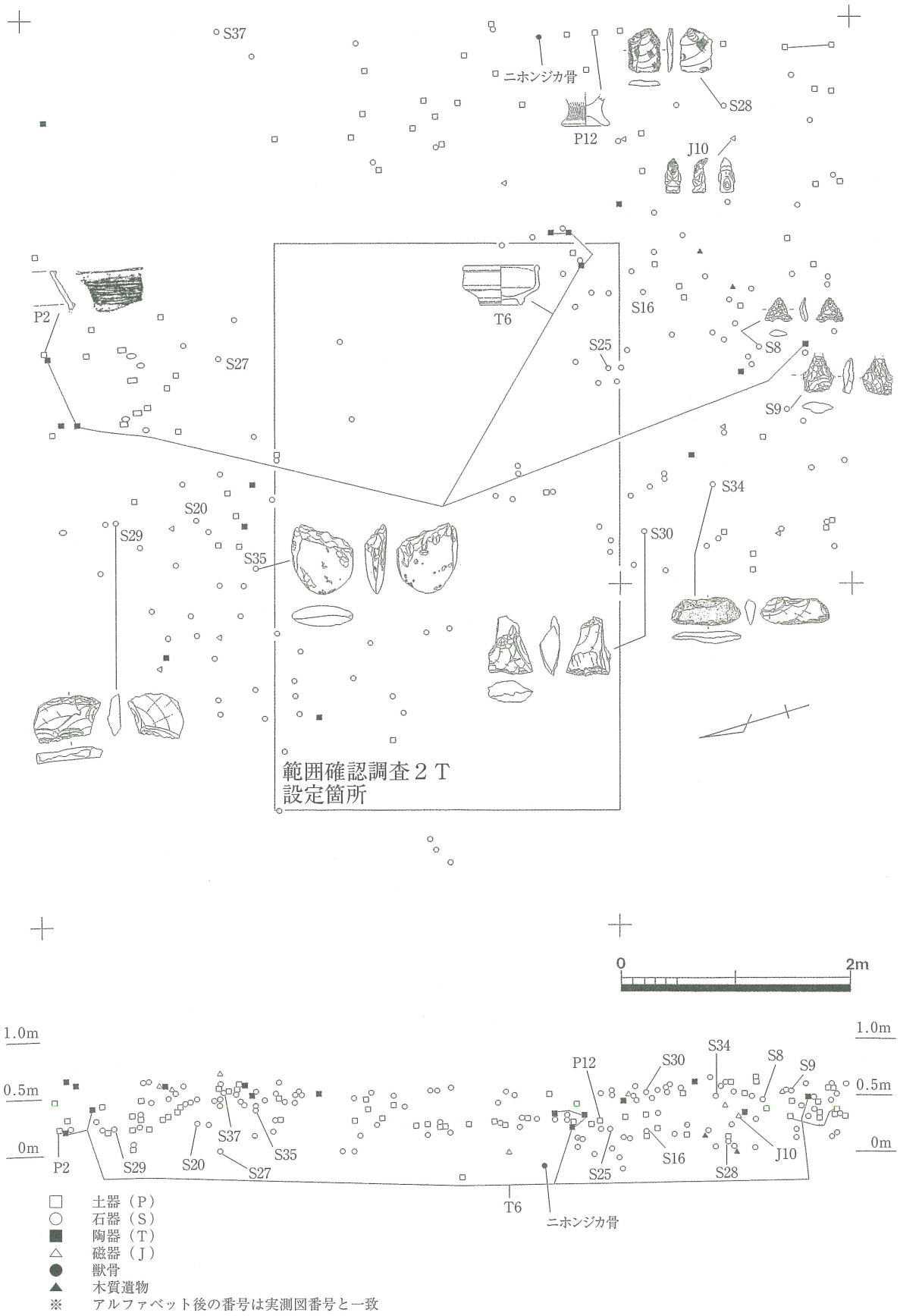
第11図　遺物分布図（範囲確認調査３～５Ｔ）（S－１／50）



第12図　遺物分布図（本調査１・２Ｔ）（S－１／50）



第13図　遺物分布図（本調査３・４Ｔ）（S－１／50）



第14図　遺物分布図（本調査５Ｔ）（S－1／50）

1．土　　器

縄文土器（第15図１・２）

１は曽畑式土器の深鉢。外面にはタテ方向の条痕ののちに、口唇部側に11～13本を１セットとするヨコ方向の短沈線を施す。内面には口唇部側にヨコ方向の短沈線を施す。口唇部には刺突文を有する。補修孔を有する。滑石は含まない。２は晩期の甕形土器。口縁部～胴部にかけて「くの字」に屈曲する。口縁部と屈曲部に突帯を有する。外面は横位の条痕。外面にススが付着する。

弥生土器（第15図１～16）

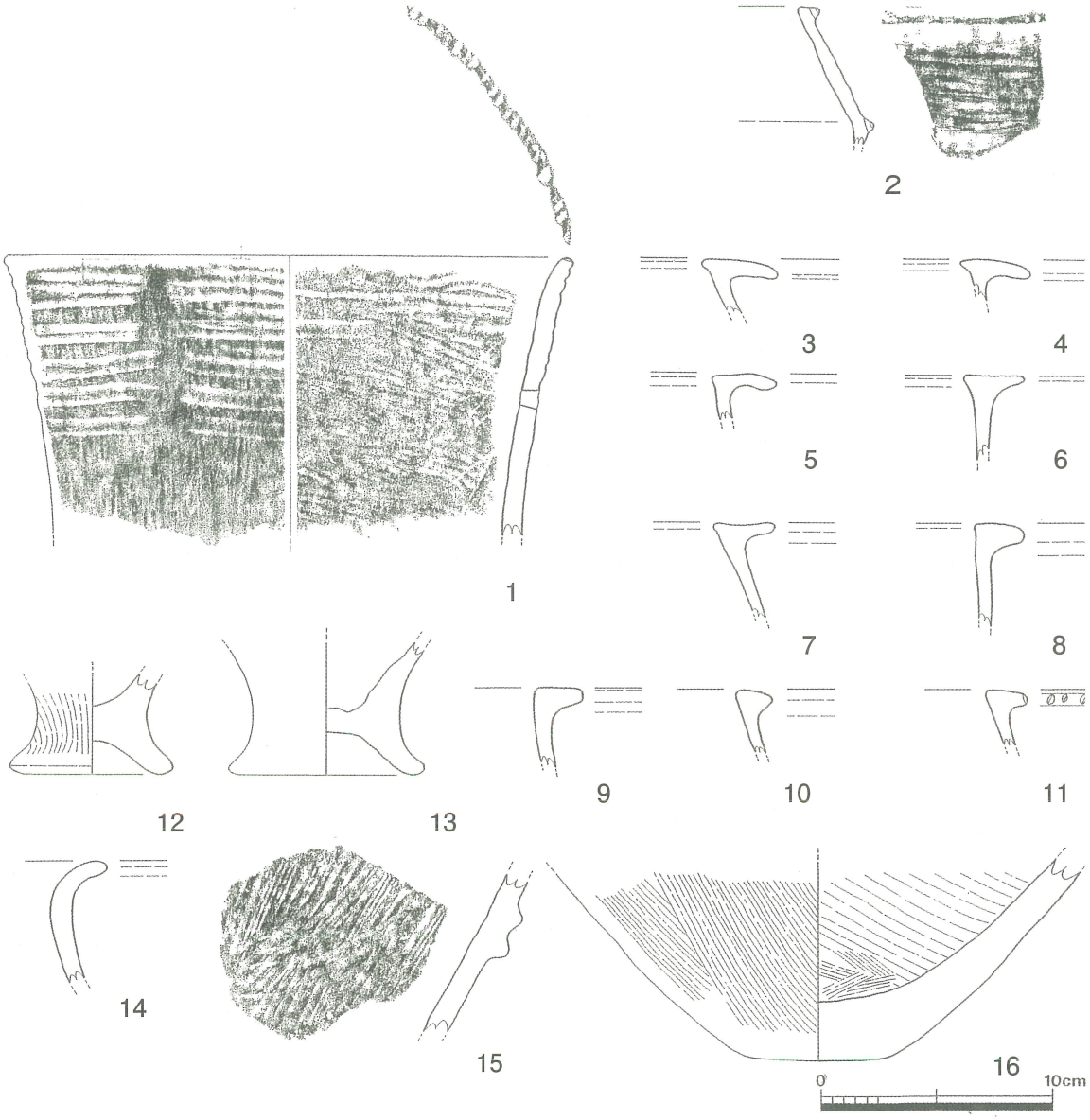
３～11は甕形土器の口縁部。３～５は鋤先形口縁。３・４は口縁端部が垂れ下がり、内側は摘み出し状となる。須久Ⅱ新（中期終末）。５は内側の摘み出しがやや弱く、端部にふくらみを持つ。須久Ⅱ古（中期後葉）。６～９は逆Ｌ字形の口縁。６は内側が摘み出し状で、上面は水平。端部はすぼまる。須久Ⅰ新（中期中葉）。７は上面がわずかに凹む。須久Ⅰ新（中期中葉）。８は内面がわずかに突出、上面は外側に傾斜する。須久Ⅰ古（中期前葉）。９は上面が平坦で、端部も平坦気味である。須久Ⅰ古（中期前葉）。10は断面三角形の口縁。中期初頭。11は逆Ｌ字形で刻目を有する。中期中葉。12・13は台付甕の脚部。14は広口壺の口縁部。15は甕形土器の胴部でＭ字形突帯を有する。外面タテハケ、内面ヨコハケ。16は甕形土器の底部。平底で外面タテハケ、内面ヨコハケ。

2．石　　器

総数730点が出土した。内訳は剥片石器112点、礫石器７点、原石・石核・砕片など611点である。定型的な剥片石器の器種としては石鏃の11点が最多で、次に削器10点、掻器６点である。礫石器では磨製石斧の５点が最多である。石鏃などの動物性資源の採集・処理具、打製石斧・磨製石斧などの労働具、石錐・削器・掻器などの加工用具が見られ、磨石・凹石・石皿などの植物性資源処理具が欠落している（第５表）。石材では青灰色黒曜石が全体の約47％、次に漆黒色黒曜石が約30％を占め、次いで安山岩が約14％を占める（第４表）。

		石器				原石			
石材		漆黒ob	青灰ob	安山岩	蛇紋岩	結晶片岩	石英	小計	合計
剥片石器	ナイフ	3						3	
	細石刃	2						2	
	石鏃	6		5				11	
	石錐	1	1	1				3	
	石匙			3				3	
	抉入石器	4						4	
	掻器	1	3	2				6	
	削器	1		9				10	
	二次加工剥片	8	4	4				16	
	使用痕剥片	32	15	7				54	112
礫石器	打製石斧			1				1	
	磨製石斧			1	4			5	
	石錘					1		1	7
その他	石核	26	26	7				59	
	砕片	66	158	24				248	
	剥片	69	137	40				246	
原石		2				50	6	58	611
合計		221	344	104	4	51	6	730	730
割合		0.303	0.471	0.142	0.005	0.070	0.008	1.000	

第４表　石器組成一覧表（石材別）



第15図　土器実測図（S－1／3）

器種		剥片石器																			
		ナイフ	細石刃	石鏃		石錐			石匙	抉入石器	掻器			削器		二次加工剥片			使用痕剥片		
石材		漆黒ob	漆黒ob	漆黒ob	安山岩	漆黒ob	青灰ob	安山岩	安山岩	漆黒ob	漆黒ob	青灰ob	安山岩	漆黒ob	安山岩	漆黒ob	青灰ob	安山岩	漆黒ob	青灰ob	安山岩
範囲確認調査	1	2	1													2			2		
	2				1		1		1	2	1				1	2	1	1	4	2	
	3					1									1						
	4																		2		
	5				2														2		
本調査	1																		3		
	2				1							2	1		1	1	1		3	1	2
	3																		3	1	
	4	1	1	4					1	1			1		2				6	7	
	5			2	1			1	1	1		1		1	4	3	2	3	7	4	5
小計		3	2	6	5	1	1	1	3	4	1	3	2	1	9	8	4	4	32	15	7
合計		3	2	11		3			3	4	6			10		16			54		
割合		0.004	0.003	0.015		0.004			0.004	0.005	0.008			0.014		0.022			0.074		

器種		磨石器				その他												
		打製石斧	磨製石斧		石錘	石核			砕片			剥片			原石			
石材		安山岩	蛇紋岩	安山岩	結晶片岩	漆黒ob	青灰ob	安山岩	漆黒ob	青灰ob	安山岩	漆黒ob	青灰ob	安山岩	漆黒ob	石英	結晶片岩	合計
範囲確認調査	1		1			3	2	1	5	15	2	9	13	4			2	64
	2			1	1		9		6	26	5	10	29	10	1	1	5	121
	3					1			2	7		11	7	1				31
	4					1			1			2	6				1	13
	5								1	2		1	2	1			1	12
本調査	1					1				2	1	1	2				1	11
	2	1				3	1	1	8	33	3	9	21	6	1		8	108
	3						1	1	2	10			2				1	20
	4					7	2	2	20	35	8	9	24	7			15	153
	5		3			10	12	2	21	28	5	17	31	11		5	16	197
小計		1	4	1	1	26	27	7	66	158	24	69	137	40	2	6	50	730
合計		1	5		1	60			248			246			58			730
割合		0.001	0.007		0.001	0.080			0.338			0.336			0.083			

第５表　石器組成一覧表（器種別）

ナイフ形石器（第16図１・２）

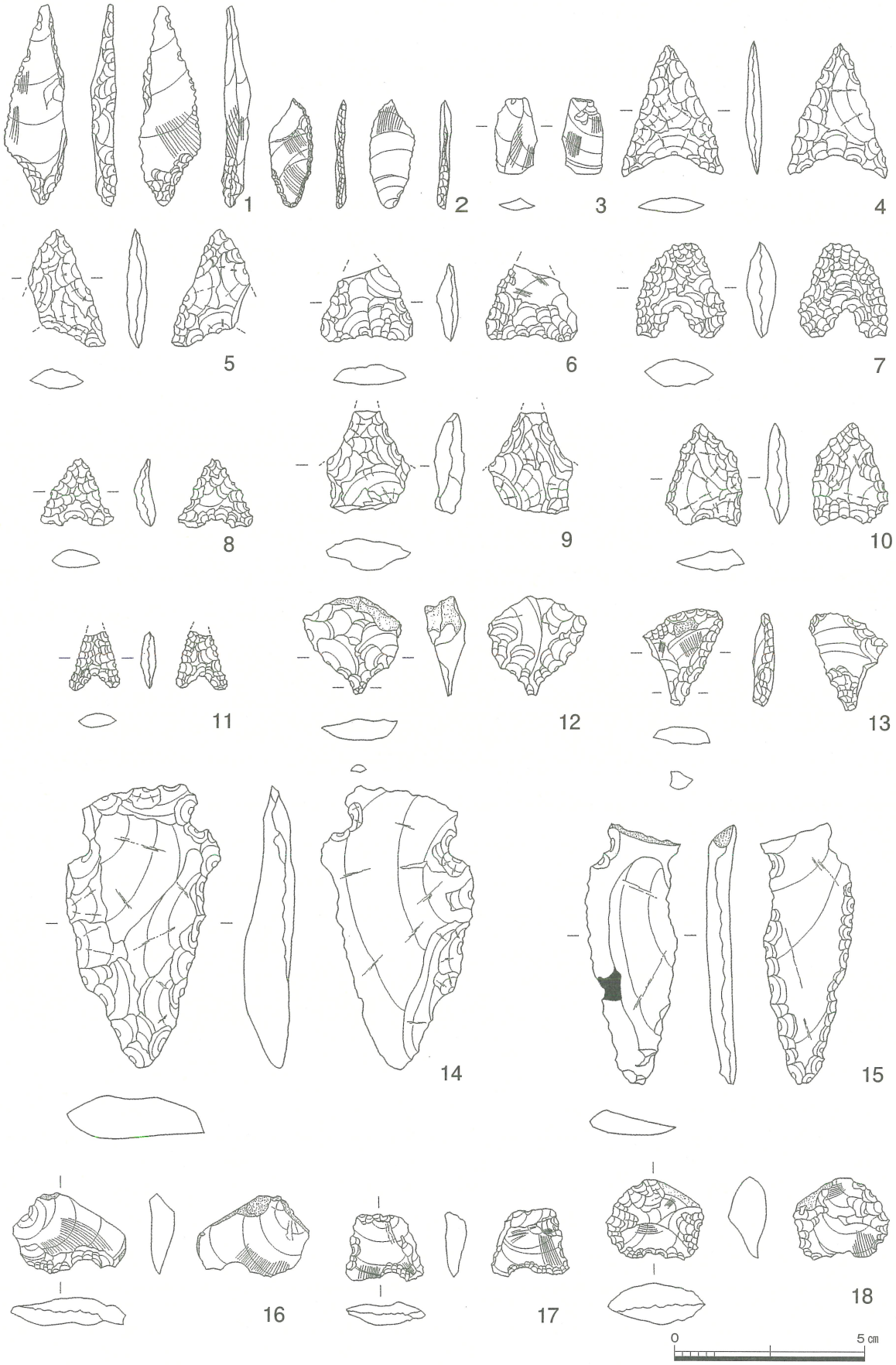
１は厚手の縦長剥片を素材とする。基部が刃部下より内湾し、舌状に作り出される。石材分析の結果、伊万里腰岳産の黒曜石と判断された。２は薄い縦長剥片を素材とする。右縁全縁及び左縁下位に急傾斜調整を施す。

細 石 刃（第16図３）

３は頭部の資料で、打面は自然面である。

石　　鏃（第16図４～11）

４は薄い剥片を素材とし、二等辺三角形を呈する。右側縁はわずかにふくらむ。先端部、脚部ともに尖る。基部は円弧状に抉りこむ。５は周縁からのやや荒い調整により整形、基部は弧状に抉りこみ、脚部はわずかに外側に張り出す。脚部左側を欠損する。６は正三角形に近い形状で、周縁からのやや荒い調整により整形、基部は浅くわずかに抉りこみ、脚部は不明瞭である。先端部を欠損する。７は分厚い剥片から作出する。全面に丁寧な調整を施し、基部を丸く深く抉る。左右非対称で左側縁は先端部に向かってカーブする。先端部は丸い。石材分析の結果、伊万里腰岳産の黒曜石と判断された。８は正三角形を呈し、円弧状に抉りこむ。脚部は外側にわずかに張り出す。刃部は鋸歯状を呈する。石材分析の結果、佐世保淀姫１群産の黒曜石と判断された。９は肩部が基部近くにある五角形状のものと思われる。10は平面形及び脚部が左右非対称で右側縁に肩を有する。両面ともに粗い調整で整形し、ともに素材面を残す。11は二等辺三角形を呈し、先端部を欠損する。両面ともに微細な調整により仕上げるが、ごく一部に素材面を残す。基部は丸く抉りこむ。



第16図　石器実測図①（S－2／3）

石　　錐（第16図12・13）

12は錐部と頭部の境が明瞭である。錐部は背面からの調整によって作出し、断面形は三角形である。13は頭部と右側縁に急角度の調整を施す。頭部と錐部の境は不明瞭であるが、腹面からの調整により錐部を作出しており、磨耗痕が認められる。

石　　匙（第16図14・15）

14は縦型の形状で大型の剥片を素材とする。両面および両側縁からの調整により明瞭なつまみ部を作出する。背面側は連続した加工によりやや急角度な分厚い刃部を作出する。腹面側の調整は荒く、右側縁のみ刃部加工している。15は縦型の形状で、両面の左側からのみの調整によりつまみ部を作出する。腹面に連続した加工により片刃の刃部を作出する。調整は全体のわずかで、素材面を多く残す。

抉入石器（第16図16～18）

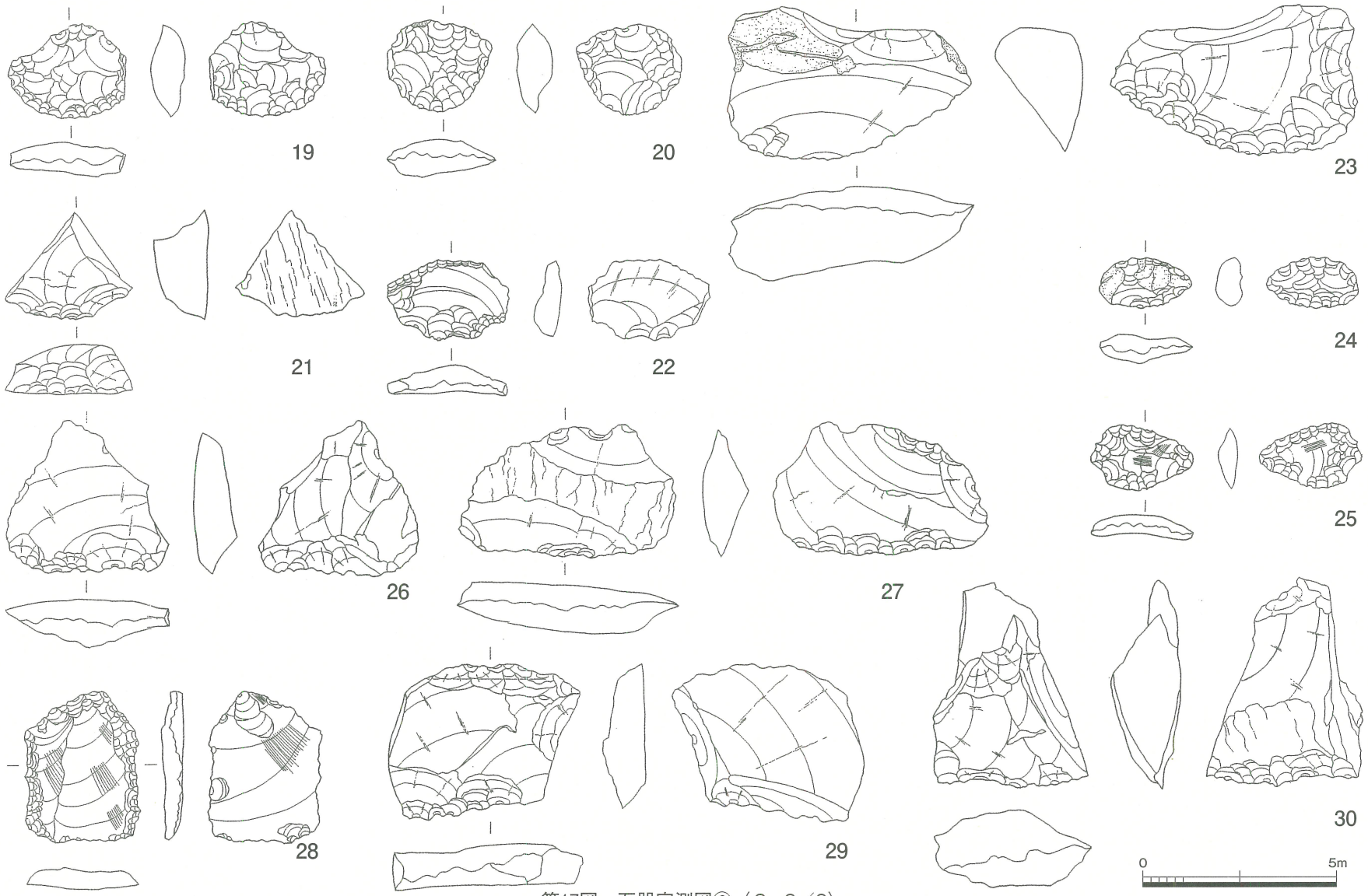
16は自然面打面から剥取した剥片を用いる。背面からの調整によりノッチ状の刃部を作出する。17は両面下端に微細な調整を施し、ノッチ状の刃部を作出する。18は自然面を有するやや厚手の剥片の一端に背面からの調整によるノッチ状の刃部を作出する。両側縁には急角度の刃部を作出する。

掻　　器（第17図19～24）

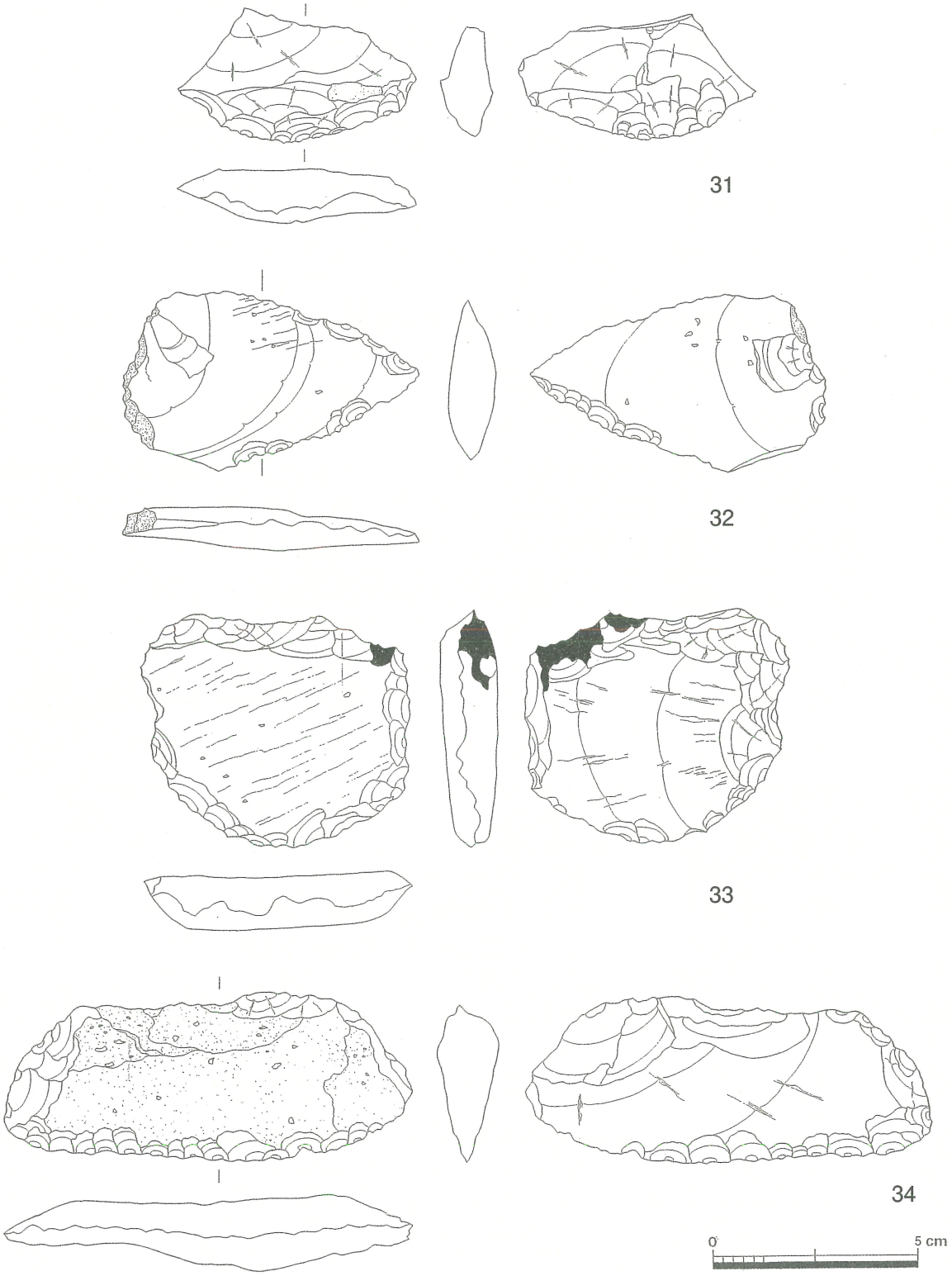
19は背面に急傾な刃部を作出している。20は両面全周を円形状に剥離調整したラウンドスクレーパーに類するものである。21は分厚い剥片を用い、下端部に急傾な刃部を作出している。22は主に背面を調整、下端に急傾な刃部を作出、上端にも急傾斜調整により刃部を作出する。23は分厚い剥片を素材とし、腹面からの調整により弧状の刃部を作出する。背面に自然面を残す。24は全周に調整を施し、刃部を作出する。木葉状を呈する。

削　　器（第17図25～30・18図31～34）

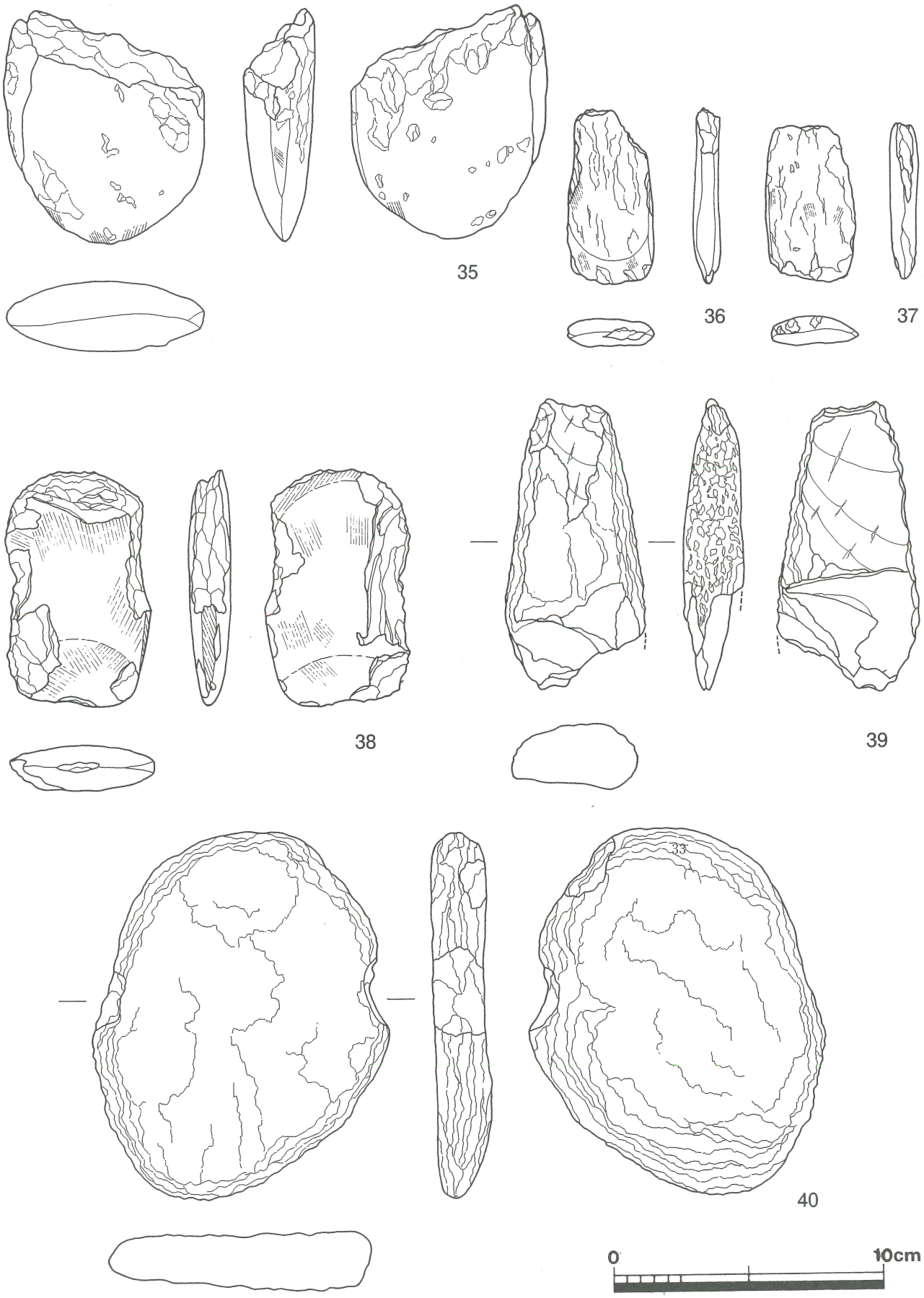
25は全周に調整を施し刃部を作出する。木葉状を呈する。26は両面からの調整により鋸歯状の刃部を作出する。27は腹面からの調整により直線的な刃部を作出する。28は背面からの丁寧な加工により両側縁に刃部を有する。若干鋸歯状を呈する。29は鋸歯状の刃部を腹面側に作出する。30は厚みのある剥片の両辺を折断し、下端に両面からの加工による刃部を作出する。31は両面からの加工により急傾な弧状の刃部を作出する。32は大型の剥片を用い、上部は片面、下部は両面からのやや粗い加工により刃部を作出する。基部には打面を残す。33は肉厚の素材を用い、ほぼ全周に両面加工による刃部を作出する。背面には自然面を残す。34は縦長の大型剥片を横位に用いる。両面ともに二次加工は周縁に限られ、自然面・素材面を大きく残す。下部には両面加工による直線的な刃部を作出する。



第17図　石器実測図②（S－2／3）



第18図　石器実測図③（S－2／3）



第19図　石器実測図④（S－1／2）

磨製石斧（第19図35～38）

35の刃部は両刃で、蛤刃を呈する。表面は風化しており、研磨の方向は不明であるが、両面の刃部に痕跡を留める。断面は扁平である。上半部を欠失する。伐採用と考えられる。36・37はともに小型の扁平な両刃の石斧で、加工用と思われる。表面の風化が著しくわずかに研磨の痕跡を留める。36は左縁上部がわずかに内湾する。37は右縁がわずかにふくらむ。刃部は左右非対称である。38は小型で胴部に緩い抉りこみを有する。両刃で全面を研磨する。

打製石斧（第19図39）

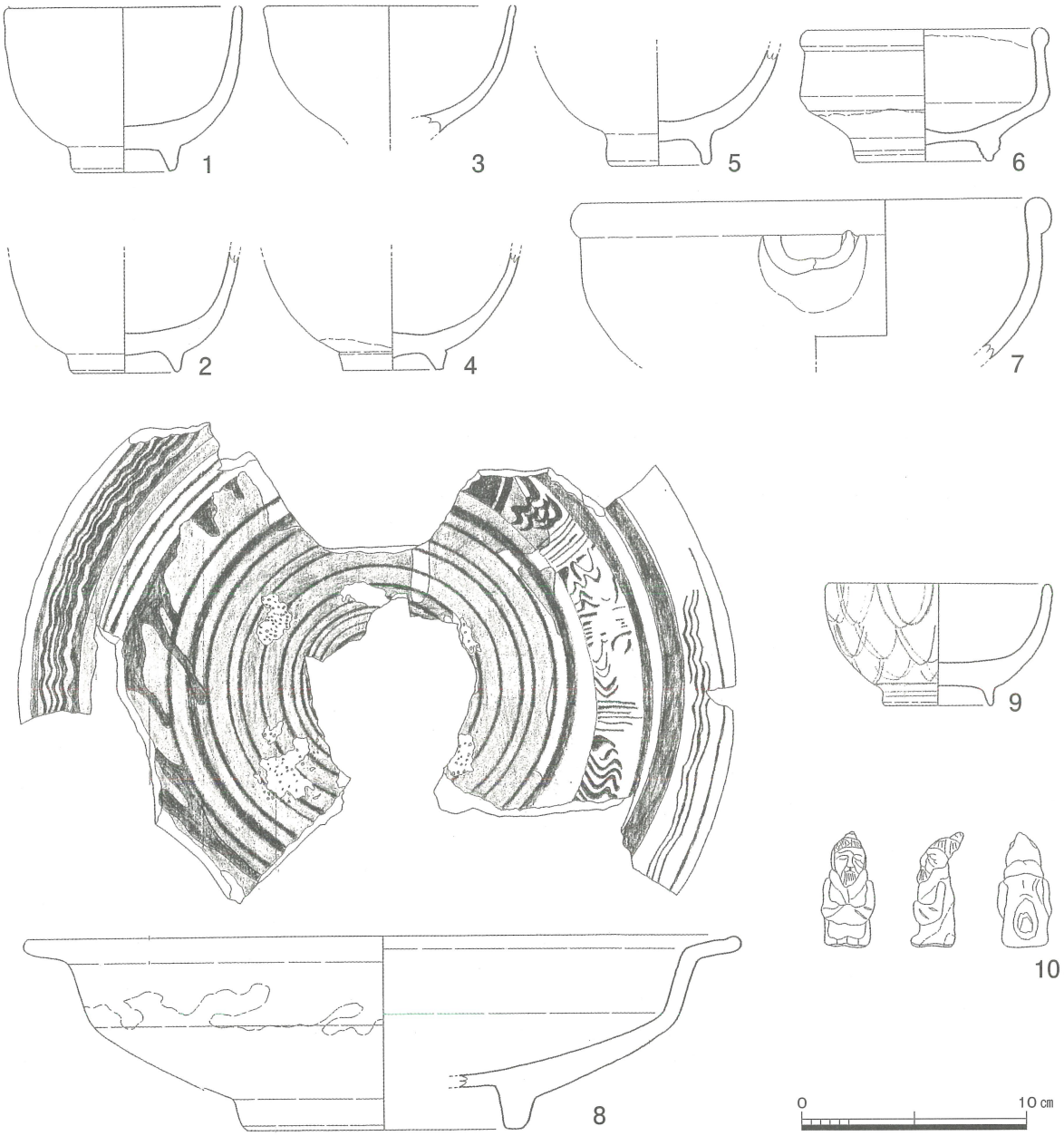
39はバチ形を呈する。両側縁は敲打により整形する。刃部と基部を欠失する。

石　　錘（第19図40）

40は扁平な楕円礫の短軸の両端に抉りを有する。一端は両面から打撃を加え、もう一端は片面のみから打撃を加える。

３．陶　磁　器

１・２はともに焼成不良で灰黄色の釉色を呈する。１は丸形碗で口縁は直口する。３は緑釉。内面は飴色に発色している。４も緑釉で高台は無釉。高台は竹節状で下方に向かってすぼまる。高台内に兜金、見込はわずかに尖る。５は天目碗。鉄釉で畳付は無釉。３箇所に胎土目の痕跡がある。６は刷毛目二彩手火入（17世紀後半～18世紀前半）。口縁部内面～胴部外面にかけて施釉する。高台内に兜金、ちりめんじわが見られる。見込もにわずかに尖る。高台内のケズリが顕著である。７は灰釉の片口（19世紀）。８は折れ縁の刷毛目大皿（17世紀後半）。畳付無釉。内面に砂目の目跡を残す。９は丸形碗で二重網目文を施す（17世紀後半～）。高台に圏線を有する。10は白磁人形で顔面には鉄釉をかける。底面から後ろに穴が貫通しており、灯芯押えとして使用されたものである。万才町Ⅲ期（1650～1690）にあたる。



第20図　陶磁器実測図（S－1／3）

図	番号	調査区分	トレンチ	器種	部位	法量(cm)〔 〕は復元		胎土	焼成	調整		色調		備考
						口径	底径			外面	内面	外面	内面	
15	1	範囲確認調査	1	深鉢	口縁部	〔24.5〕		砂粒・石英・角閃石	良好	ナデ	条痕＋ナデ	褐灰色	灰黄褐色	曽畑式土器・外面スス付着・補修孔・口唇部刺突
	2	本調査	5	甕形土器	口縁部			砂粒・石英・雲母	良好	条痕＋ナデ	ナデ	黒褐色	灰褐色	晩期・外面スス付着
	3	範囲確認調査	2	甕形土器	口縁部			砂粒・石英・雲母	良好	ナデ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	
	4	範囲確認調査	2	甕形土器	口縁部			砂粒・石英・雲母	良好	ナデ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	
	5	本調査	2	甕形土器	口縁部			砂粒・石英・雲母・角閃石	良好	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	
	6	範囲確認調査	2	甕形土器	口縁部			砂粒・石英・角閃石	良好	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	明赤褐色	
	7	範囲確認調査	2	甕形土器	口縁部			砂粒・石英・角閃石	良好	ナデ	ナデ	灰褐色	にぶい褐色	
	8	本調査	4	甕形土器	口縁部			砂粒・石英・雲母	良好	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	
	9	本調査	4	甕形土器	口縁部			砂粒・石英・雲母・角閃石	良好	ナデ	ナデ	浅黄色	にぶい黄橙色	石英を多量に含む
	10	本調査	2	甕形土器	口縁部			砂粒・石英・雲母	良好	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	
	11	範囲確認調査	2	甕形土器	口縁部			砂粒・石英・角閃石	良好	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	口唇部刻目
	12	本調査	5	甕形土器	脚部		7.3	砂粒・石英・角閃石	良好	ハケ＋ナデ		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内面スス付着
	13	範囲確認調査	1	甕形土器	脚部		8.4	砂粒・石英・角閃石	良好	ナデ		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
	14	範囲確認調査	1	壺形土器	口縁部			砂粒・石英・角閃石	良好	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
	15	本調査	2	壺形土器	胴部			砂粒・石英・雲母・角閃石	良好	ハケ＋ナデ	ハケ	にぶい黄橙色	明褐色	M字突帯
	16	本調査	3	壺形土器	底部		6.0	砂粒・石英・雲母・角閃石	良好	ハケ＋ナデ	ハケ＋ナデ	橙色	にぶい黄褐色	

第6表　土器観察表

図	番号	器種	区分	トレンチ	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
						cm	cm	cm	g	
16	1	ナイフ	本調査	4	漆黒色ob	5.3	1.6	0.7	3.7	石材鑑定
	2	ナイフ	範囲確認	1	漆黒色ob	2.9	1.2	0.3	0.8	
	3	細石刃	本調査	4	漆黒色ob	2.0	1.1	0.3	0.4	
	4	石鏃	範囲確認	5	安山岩	3.4	2.1	0.4	1.9	
	5	石鏃	本調査	2	安山岩	3.1	(2.1)	0.5	2.1	
	6	石鏃	本調査	4	漆黒色ob	(2.0)	2.4	0.5	1.6	
	7	石鏃	本調査	4	漆黒色ob	2.5	2.4	0.7	3.0	石材鑑定
	8	石鏃	本調査	5	漆黒色ob	1.8	2.0	0.5	1.0	石材鑑定
	9	石鏃	本調査	5	安山岩	(2.8)	2.2	0.8	4.1	
	10	石鏃	範囲確認	2	安山岩	2.6	2.0	0.6	2.1	
	11	石鏃	本調査	4	漆黒色ob	(1.5)	(1.3)	0.3	0.4	
	12	石錐	範囲確認	2	青灰色ob	2.6	2.6	0.9	4.0	
	13	石錐	範囲確認	3	漆黒色ob	2.6	2.0	0.4	1.8	
	14	石匙	本調査	5	安山岩	7.4	3.6	1.2	29.9	
	15	石匙	本調査	4	安山岩	6.8	2.3	0.6	9.3	
	16	抉入石器	本調査	5	漆黒色ob	2.1	3.0	0.6	3.2	
	17	抉入石器	本調査	4	漆黒色ob	1.7	2.0	0.5	1.8	
	18	抉入石器	範囲確認	2	漆黒色ob	2.1	2.5	1.0	4.0	
17	19	掻器	本調査	2	青灰色ob	2.4	3.0	0.9	5.7	
	20	掻器	本調査	5	青灰色ob	2.4	2.8	0.9	4.8	
	21	掻器	本調査	2	安山岩	2.9	3.3	1.4	9.3	
	22	掻器	範囲確認	2	漆黒色ob	2.1	3.2	0.7	4.0	
	23	掻器	本調査	4	安山岩	3.9	6.4	2.3	51.6	
	24	掻器	本調査	2	青灰色ob	1.3	2.4	0.7	1.9	
	25	削器	本調査	5	漆黒色ob	1.8	2.6	0.5	1.8	
	26	削器	本調査	2	安山岩	4.0	4.2	1.0	14.5	
	27	削器	本調査	5	安山岩	3.5	5.7	1.2	18.9	
	28	削器	本調査	5	漆黒色ob	3.9	2.9	0.5	6.0	
	29	削器	本調査	5	安山岩	4.2	5.0	1.1	28.7	
	30	削器	本調査	5	安山岩	5.3	4.1	1.9	29.4	
18	31	削器	範囲確認	2	安山岩	3.2	5.7	1.3	17.6	
	32	削器	本調査	4	安山岩	4.4	7.2	1.1	27.1	
	33	削器	範囲確認	3	安山岩	5.7	6.5	1.2	71.7	
	34	削器	本調査	5	安山岩	3.8	9.9	1.4	58.6	
19	35	磨製石斧	本調査	5	蛇紋岩	(8.5)	7.3	2.5	175.3	
	36	磨製石斧	範囲確認	1	蛇紋岩	6.4	3.2	1.0	25.5	
	37	磨製石斧	本調査	5	蛇紋岩	5.3	3.3	1.0	22.5	
	38	磨製石斧	範囲確認	2	安山岩	8.7	5.3	1.7	101.2	
	39	打製石斧	本調査	2	安山岩	10.7	4.6	2.3	151.0	
	40	石錘	範囲確認	2	結晶片岩	13.4	10.8	1.9	450.2	

(　　)は残存長

第７表　石器観察表

陶器

図	番号	調査区分	トレンチ	器種	法量（cm）〔　〕は復元			胎土	施釉部位	釉薬	備　考
					口径	器高	底径				
20	1	本調査	4	碗	10.5	7.3	4.8	橙色	畳付露胎	灰釉	焼成不良
	2	本調査	2	碗			4.9	淡黄色	畳付露胎	灰釉	焼成不良
	3	本調査	2	碗	〔11.2〕			灰白色		緑釉	
	4	本調査	4	碗			4.8	灰白色	底部露胎	緑釉	竹節高台・兜金
	5	本調査	2	碗			4.8	褐灰色	畳付露胎	鉄釉	天目碗
	6	本調査	5	火入れ	11.0	5.9	6.5	明赤褐色	底部露胎		兜金・ちりめんじわ
	7	本調査	2	片口	21.4			浅黄色		灰釉	
	8	範囲確認調査	1	大皿	〔31.8〕	8.6	〔13.1〕	にぶい黄橙色	底部露胎		

磁器

図	番号	調査区分	トレンチ	器種	法量（cm）〔　〕は復元			文　様	施　釉	備　考
					口径	器高	底径			
20	9	本調査	4	碗	10.1	5.5	5.0	二重網目文・高台二重圏線	畳付露胎	砂付着
	10	本調査	5	人形		5.1			鉄釉	灯芯押

第８表　陶磁器観察表

第Ⅳ章　まとめ

今回の調査結果について、近隣の浜田遺跡の調査結果を踏まえながら若干の考察を行いたい。

浜田遺跡は本遺跡の南東方向500ｍに位置する。東大川、西大川が大村湾に流れ込む河口部にあたる標高１ｍほどの狭い沖積地にあり、大村湾の海水が入り込んでいた状況が伺われる。基盤は砂岩盤で、標高１ｍを境に四方に急激に落ち込んでいる。土器は縄文時代前期を主とし、後期、晩期の土器も出土している。このほかにナイフ形石器や細石刃など旧石器時代の遺物、イノシシ骨などが出土している。貝類については自然貝層で、ほとんどが海水産のものであり、淡水産のものが若干含まれている。かつては周辺に微高地が点在し、のちにこれらは耕作のために削平されたと考えられるが、この微高地上に生活の場があり、出土遺物は自然的要因で基盤上に流れこんだものとしている。

遺跡の環境について

本遺跡も標高１ｍほどの低湿地にあり、砂岩盤を基盤とする点や、出土する貝類も自然貝層で、貝塚を形成していない点において共通している。貝類も内湾水域～湾奥部の潮間帯に生息する内湾砂底群集や干潟群集に属する種が多く出土している。浜田遺跡と同様に当時は大村湾の海水が入り込んでいたものと考えられる。

石器組成について

石器では、石鏃・石錘（漁網用）などの狩猟・漁労による動物性資源の採集具、打製石斧・磨製石斧などの労働具、石錐・削器・掻器などの加工用具が見られ、磨石・凹石・石皿などの植物性資源処理具が欠落しており、この点も浜田遺跡と共通している。磨石・凹石・石皿などが確認されず（土壙が貯蔵穴の可能性もあるものの）、石鏃・石錘が確認されていること、若干であるがイノシシ・ニホンジカの骨が出土していることから、本遺跡では漁労・狩猟により動物性資源を捕獲する割合が高かったと考えられる。また、磨石・凹石・石皿といった鈍重な礫石器がないということから、定住ではない遺跡であると考えられる。

曽畑式土器について

両遺跡ともに縄文時代前期後半の曽畑式土器が出土している。本遺跡では１点のみの出土であるが、口縁部文様帯に刺突文を持たず、口唇部直下より沈線を施文する点や胎土に滑石を混入しない点において後出のものと考えられ、曽畑Ⅱ式土器新段階に属すると思われる。

本遺跡での出土数を考慮すれば即断はできないが、浜田遺跡において刺突文を有するものや滑石を混入するものが出土しており、これらは比較的古い様相を持っていることから、浜田遺跡→本遺跡への移行が考えられる。

弥生時代以降について

これまで、本遺跡周辺では旧石器～縄文時代にかけての複合遺跡は比較的多く発見・調査されているものの、弥生～古墳時代時代の遺跡については類例が少なく、貝津横島Ａ遺跡（貝津

町）で古墳時代の箱式石棺、滑川遺跡（貝津町）で弥生時代中期初頭の箱式石棺墓やカメ棺墓が知れらている程度である。浜田遺跡では弥生土器が出土していないが、本遺跡では弥生時代中期初頭～終末の土器が出土している。大村湾沿岸では弥生時代中期になると湾を見下ろす低丘陵に箱式石棺墓が築かれるようになるが、本遺跡で弥生時代の痕跡が見られるのには、おそらくこの時期の遺跡の立地との関連があるのではないだろうか。つまり、浜田遺跡から大村湾側へと遺跡の立地が移った結果ではないだろうか。

近世にはこの地域で寛文（1661～1672年）の頃から製塩業が盛んとなるが、出土陶磁器には17世紀後半のものがあり、活況を呈した当時の状況を垣間見ることができる。

貝津横島Ｂ遺跡は内湾に立地する遺跡であり、出土遺物からは、シカ・イノシシなどの陸獣の狩猟や潮間帯での石錘による漁労を主とした生活が想定される。しかし、貝塚を形成しない点、鈍重な石器が見られない点から、それは定住的なものでなかったと考える。

弥生時代になると遺跡の立地は大村湾側へと移り、本遺跡の立地が弥生時代の箱式石棺墓が出土した滑川遺跡と共通していることから、近隣に同時期の墓域が存在する可能性がある。

調査により出土した遺物はいずれも層位的出土状況ではなく二次堆積であり、これが自然的要因によるものか耕作を意図した人為的な造成によるものかは判然としない。また、出土遺物そのものも考察を加えるには質量的にやや乏しい内容であったが、当遺跡周辺での人々の生活が旧石器時代から近世の長期に及ぶものであったことを示している。

当地域では、滑川、貝津横島Ｂ両遺跡の調査が相次いだことで、新たな知見が得られたが、住居跡などに関しては未解明の状況であり、残された課題はまだ多い。今後の調査例の増加により、より詳細な検討が可能になることを期待したい。

【参考文献】

『浜田遺跡』　九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　長崎県教育委員会　1981
『名切遺跡』　長崎県文化財調査報告書第71集　長崎県教育委員会　1985
『曽畑』　熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会　1988
『伊木力遺跡』　多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室編　1990
『万才町遺跡』　長崎県文化財調査報告書第123集　長崎県教育委員会　1995
『頭ヶ島白浜遺跡』　有川町文化財調査報告書第１集　有川町教育委員会　1996
『築町遺跡』　長崎市教育委員会　1997
『宮下貝塚』　富江町文化財調査報告書第１集　富江町教育委員会　1998
『興善町遺跡』　長崎市教育委員会　1999
『九州陶磁の編年』　九州近世陶磁学会　2000
『出島和蘭商館跡　西側建造物復元事業に伴う発掘調査報告書』　長崎市教育委員会　2000
『玖島遺跡』　長崎県文化財調査報告書第167集　長崎県教育委員会　2002
『松崎遺跡』　勝本町文化財調査報告書第11集　勝本町教育委員会　2003
『原の辻遺跡　総集編Ⅰ』　原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集　長崎県教育委員会　2005
『権現脇遺跡』　深江町文化財調査報告書第２集　深江町教育委員会　2006

附　　編

貝津横島Ｂ遺跡における自然科学分析

株式会社古環境研究所

Ｉ．放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(^{14}C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の^{14}C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、貝津横島Ｂ遺跡で出土した貝化石を対象に、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築年代に関して検討を行った。測定にあたっては、米国の Beta Analytic Inc., の協力を得た。

２．試料と方法

測定試料は、本調査第５トレンチ６ａ層で出土した貝化石１点である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

１）蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄
２）塩酸（HCl）により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム（NaOH）により二次的に混入した有機酸を除去
３）再び塩酸（HCl）で洗浄後、アルカリによって中和
４）定温乾燥機内で80℃で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、ｎ-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表１にまとめた。

表１　測定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
№1	本調査第５トレンチ６ａ層	貝	酸洗浄	ＡＭＳ

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

３．結　　果

年代測定の結果を表２に示す。

（１）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から、単純に現在（ＡＤ1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は国際的慣例により Libby の5568年を使用した（実際の半減期は5730年）。

（2） δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（3） 補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C値を－25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

（4） 暦年代 Calendar Age

^{14}C年代測定値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値およびサンゴのU／Th（ウラン／トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC 24050年までの換算が可能である（樹木年輪データはBC 10450年まで）。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68％確率）と２σ（95％確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

２．測定結果

試料名	測定№ (Beta-)	^{14}C年代[1] (年BP)	δ^{13}C[2] (‰)	補正^{14}C年代[3] (年BP)	暦年代（西暦）[4]	
№1	237262	4020±40	-0.2	4430±40	交点：cal	BC 2630
					１σ：cal	BC 2700～2570
					２σ：cal	BC 2820～2540

４．所　見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、本調査第５トレンチ６ａ層で出土した貝化石の年代値は、4430±40年BP（１σの暦年代でBC 2700～2570年）であった。

文　献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

尾嵜大真（2005）ＩＮＴＣＡＬ98からIntCal04へ．学術創成研究費　弥生農耕の起源と東アジア№３－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－，p.14-15.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.１-36.

Ⅱ．黒曜石の産地推定分析

１．はじめに

貝津横島Ｂ遺跡で出土した黒曜石製石器について元素分析を行い、原産地の推定を試みた。

２．試料と方法

対象試料は、貝津横島Ｂ遺跡より出土した黒曜石のナイフ形石器１点（試料番号１・第16図１）と石鏃２点（小：試料番号２・第16図８、大：試料番号３・第16図７）である（表１）。

分析装置は、㈱セイコーインスツルメンツ社製の卓上型蛍光Ｘ線分析計 SEA-2110L を使用した。装置の仕様は、Ｘ線管はロジウムRhターゲット、Ｘ線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間240sec、照射径10㎜、電流自動設定（1-63μA、デッドタイムが20％未満になるよう自動的に設定）、電圧50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。産地推定には、蛍光Ｘ線分析によるＸ線強度を用いた判別図法（望月2004）を用いた。本方法は、まず各試料を蛍光Ｘ線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計７元素のＸ線強度(cps;count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

１）Rb 分率＝ Rb 強度×100／(Rb 強度＋ Sr 強度＋Ｙ強度＋ Zr 強度)

２）Sr 分率＝ Sr 強度×100／(Rb 強度＋ Sr 強度＋Ｙ強度＋ Zr 強度)

３）Zr 分率＝ Zr 強度×100／(Rb 強度＋ Sr 強度＋Ｙ強度＋ Zr 強度)

４）Mn 強度×100／ Fe 強度

５）log(Fe 強度／Ｋ強度)

これらの指標値を用いた２つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100／Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log(Fe強度／Ｋ強度)の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定する。

３．分析結果

表１に産地推定結果を示す。図１および図２に黒曜石原石の判別図と貝津横島Ｂ遺跡出土試料をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、ナイフ形石器と石鏃（大）は伊万里腰岳群、石鏃（小）は佐世保淀姫１群の範囲に収まった。判別図による推定結果と多変量解析（判別分析）による推定結果は極めて良く一致しており、推定結果の信頼度は高いものと考えられる。また、判別分析における帰属確率もすべての試料で99.9％を超えていることからも信頼度は高いと思われる。

４．ま と め

貝津横島Ｂ遺跡より出土した黒曜石について蛍光Ｘ線分析による産地推定を行った。その結果、ナイフ形石器と石鏃（大）は伊万里腰岳群産、石鏃（小）は佐世保淀姫１群産と判断された。

伊万里腰岳群は腰岳産の黒曜石で代表されるが、針尾島、松浦からもこれと判別不可能な原石が検出されている。これらが同一の原産地から移動したものか、別の原産地のものかは現時点ではわから

ない。区別するための最も簡単な方法はフィッショントラック法による年代測定だと考えられる。もし、生成年代まで一致すれば同じ原産地の可能性が高い。

針尾島については整理中で未発表であり、詳述できない。今回の群もこれからの検討によっては名称変更することになる。

いずれにしろ、針尾島の黒曜石は非常に複雑であり、松浦も針尾島と同様の状況である。しかも、針尾島と松浦の両方で確認される群もある。したがって北九州の黒曜石については、判別群を決めることは可能であるが、その原産地を特定することは必ずしもできるわけではない、という状況である。

引用文献・参考文献

望月明彦（2004）用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定．かながわ考古学財団調査報告167　用田大河内遺跡，511-517，財団法人　かながわ考古学財団

表1　貝津横島B遺跡出土黒曜石製石器産地推定結果

試料番号	試料		推定産地	判別図判別群	判別図法・判別分析からの最終推定結果			判別図法による推定結果と判別分析による推定結果		
					判別分析					
					第1候補産地			第2候補産地		
					判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
1	ナイフ形石器	01-03.jpg	伊万里腰岳群	IMKD	IMKD	2.31	0.9992	SSHS	12.42	0.0008
2	石鏃（小）	01-03.jpg	佐世保淀姫1群	SSYH1	SSYH1	0.86	1	SSH1U	17.66	0
3	石鏃（大）	01-03.jpg	伊万里腰岳群	IMKD	IMKD	3.82	0.9994	SSHS	14.72	0.0006

IMKD：伊万里腰岳群，SSYH1：佐世保淀姫１群，SSHS：佐世保針尾古里，SSH1U：佐世保針尾１U群

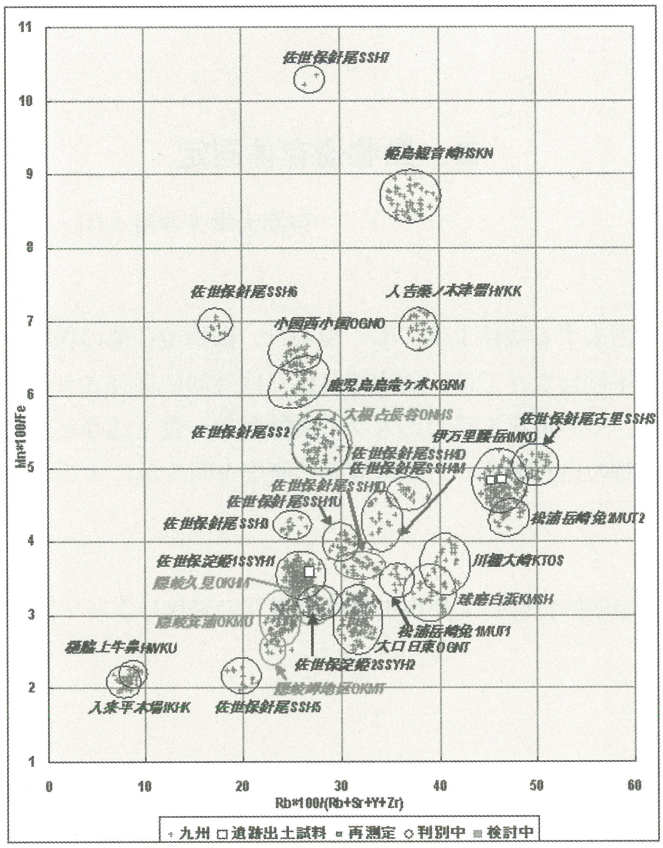


図１　貝津横島Ｂ遺跡出土黒曜石判別図(1)

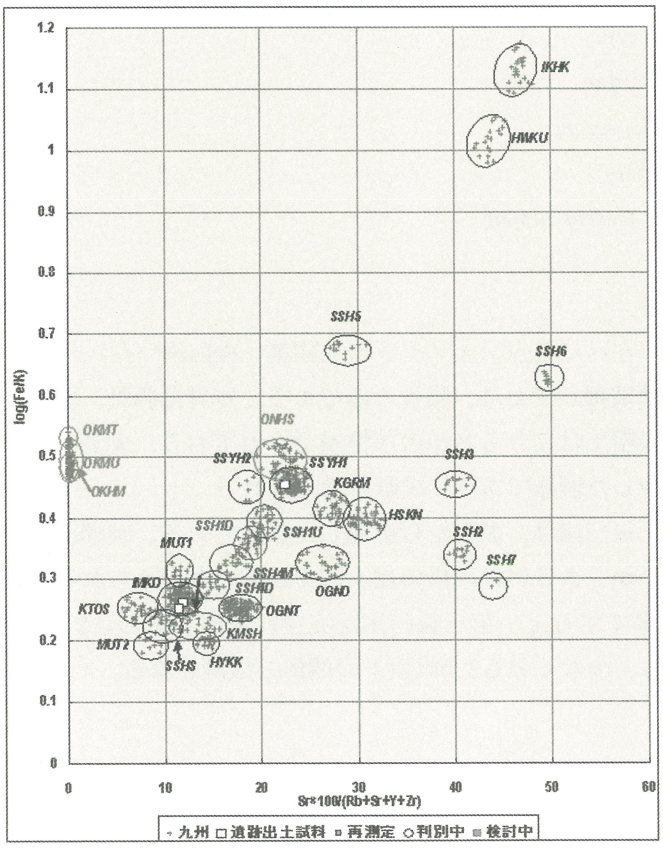


図２　貝津横島Ｂ遺跡出土黒曜石判別図(2)

Ⅲ．動物遺存体同定

京都大学大学院人間・環境学研究科　丸山　真史

１．はじめに

日本の国土は火山灰に由来する酸性土壌に広く覆われ、動物遺存体の保存状態には恵まれない。その中で貝塚、低湿地、海岸砂丘などでは、動物遺存体が例外的に保存される。そうした断片的な資料を蓄積することによって、その遺跡を残した人々の動物利用、食生活などを解明する手掛かりとすることができ、ひいては当時の自然環境や人間の適応の歴史を明らかにすることができる。

２．方　　法

試料を肉眼で観察し、形態的特徴および現生骨格標本との対比によって同定を行った。

３．結　　果

（１）分類群

同定された以下のとおりである。学名、和名および部位を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。

脊椎動物門　Vertebrata
　哺乳綱　Mammalia
　　偶蹄目　Artiodactyla
　　イノシシ科　Suidae
　　イノシシ　*Sus scrofa*
　　シカ科　Cervidae
　　ニホンジカ　*Cervus nippon*

（２）動物遺存体の特徴

ニホンジカの寛骨（左）が１点、イノシシの上顎第三後臼歯（左）が１点、計２点が出土した。

ニホンジカの寛骨は破損しており、腸骨のみである。寛骨は腸骨、座骨、恥骨が癒合したものであり、幼齢、若齢の段階ではこれら３つの部位が分かれており、成長するとこれらが癒合する。出土資料はこれらが癒合した個体であり、成獣と考えられる。

イノシシの上顎第三後臼歯は、顎骨から遊離した状態である。咬頭は摩耗が進行しておらず、顎骨から萌出していないか、あるいは萌出の途上にあるものと考えられる。林（1977）による下顎後臼歯の萌出年齢を参考にすると、第三後臼歯が完全に萌出するのは2.5歳から3.5歳である。したがって、この遊離歯は、少なくとも3.5歳以下の個体と推測される。

参考文献

林良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂1977「日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定」『日本獣歯学雑誌39』pp.165-174

表１　貝津横島Ｂ遺跡出土の脊椎動物遺存体

番号	地点	大分類	小分類	部位	部分	左右	計測
7794	本調査5TB1	哺乳類	ニホンジカ	寛骨	腸骨	左	－
－	範囲確認調査2TB2	哺乳類	イノシシ	遊離歯	上顎M3	左	L31.55B17.83

貝津横島Ｂ遺跡の脊椎動物遺存体

1　イノシシ
上顎第３臼歯（左）
5.0mm

2　ニホンジカ
寛骨（左）
10.0mm

Ⅳ．軟体動物遺存体同定

京都大学大学院　人間・環境学研究科　納屋内高史
奈良文化財研究所　松井　　章

１．はじめに

動物遺存体のうち貝類は、大部分が無機塩類（主に炭酸カルシウム）からなる貝殻を持つことから腐食に強く、土中でも残りやすい。それらの種を同定し、その生態的情報を援用することにより、当時の主に水環境の復元や、種によっては水深を知ることができるほか、過去の人々の生業や食生活についての情報を得ることができる。

２．試　　料

試料は発掘時に採取された貝層（本調査５Ｔ　６ａ層）のブロックサンプル640ｇである。

３．方　　法

試料を１㎜目の篩ですべて水洗篩別した後、篩上に残ったものを肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、手元にある現生標本、および『日本近海産貝類図鑑』、『世界文化生物大図鑑　貝類　改訂版』との対比により同定した。また、殻長、殻高の計測、個体数の計数もおこなった（奥谷編2000，2004）*i。

４．結　　果

（１）分類群

同定された分類群は、腹足綱８種10個体、斧足綱13種19個体、計29個体の合計21分類群である。結果一覧を表２に、出土した貝類の計測値を表３に、生態分類表を表４に示し、各分類群を写真に示す。

（２）種ごとの詳細

・腹足綱

ヒメコザラ

１個体が出土している。本種は、主に外洋に面した岩礁の潮間帯に生息する。ヒメコザラは殻の形状変異が著しく、ヒメコザラ型、シボリガイ型、ツボミガイ型などの型に分類されている（奥谷2000）。出土資料は殻の形態と殻表面の放射状の縞模様から、ヒメコザラ型に分類される。大きさは殻長3.5㎜を測り、小型のものである。

コシダカガンガラ

１個体が出土している。本種は、主に内湾から外洋に面した岩礫地の、潮間帯から潮下帯にかけて生息する。大きさは、殻幅31.6㎜、殻高34.0㎜を測る。

フトヘナタリ

１個体が出土している。本種は、河口部や汽水域の泥質干潟などに生息する。大きさは殻幅7.2㎜を測る。

ヘナタリまたはカワアイ

２個体が出土している。口唇部を欠損しており、種を同定することができない。ヘナタリ、カワアイのいずれも、汽水域の泥質干潟などに生息する。

ウミニナまたはホソウミニナ

１個体が出土している。口唇部を欠損しており、種を同定することはできない。ウミニナ、ホソウミニナのずれも、主に内湾の干潟などに生息する。

オオヘビガイ

破片数にして７点が出土している。出土資料は殻頂部、口唇部、螺層の破損が著しいため、個体数を算出することができない。本種は、主に外洋に面した岩礁に生息する。

イシマキガイ

１個体が出土している。本種は成長とともに汽水域から淡水域へ生息場所を移動させる。大きさは、殻幅7.4㎜、殻高6.5㎜を測る。

アカニシ

１個体が出土している。本種は、主に内湾の砂泥質の干潟などに生息する。大きさは、計測はできないが、標本との比較から、殻高100.0㎜程度と推測される。

・斧足綱

マガキ

左殻が１点出土し、最小個体数は１個体である。本種は、岩礁地帯や内湾の干潟などに生息する。大きさは、殻長、殻高の計測はできなかったものの、かなり小型の個体である。

カキ類

右殻が１点出土し、最小個体数は１個体である。保存状態に恵まれず、種の同定には至らない。

カブラツキガイ

左殻１点、右殻２点が出土し、最小個体数は２個体である。本種は、現在では沖縄諸島から熱帯太平洋を中心に分布し、内湾の干潟などに生息する。大きさは、左殻が殻長40.1㎜、右殻は殻高43.2ｍｍを測る。

イセシラガイ

左殻１点が出土し、最小個体数は１個体である。本種は、内湾の干潟から水深20ｍ程度の泥質の海底に深く潜って生息する。大きさは縁辺が欠損しているが、殻長55㎜程度、殻高58㎜程度の個体と考えられる。

キクザル

左殻１点、右殻２点が出土し、最小個体数は２個体である。本種は、主に外洋や内湾に面した岩礁に生息する。大きさは、左殻が殻高46.0㎜、右殻がそれぞれ殻長16.5㎜と35㎜程度、殻高22.3㎜と31.5㎜であった。

ヒメシラトリ

右殻１点が出土し、最小個体数は１個体である。本種は、内湾の干潟や泥質の海底に生息し、特にアマモなどが生い茂る藻場に多く生息する。大きさは、殻長24.5㎜、殻高14.1㎜を測る。

ウネナシトマヤガイ

右殻１点が出土し、最小個体数は１個体である。本種は、汽水域潮間帯の礫上に生息する。大きさは、殻高14.1㎜を測る。

シラオガイ

左殻４点、右殻４点と最も多く出土し、最小個体数は４個体である。本種は、主に内湾や外洋に面した粒度の粗い砂浜や砂質の海底に生息する。大きさは、左殻が殻長34から44㎜程度、殻高30から35㎜程度を測る。右殻は殻長、殻高双方が計測できたものは少ないが、左殻と同程度の大きさであった。

ケマンガイ

左殻２点、右殻２点が出土し、最小個体数は２個体である。本種は、主に外洋に面した砂礫質の海岸や海底に生息する。大きさは、左殻が殻長40㎜程度、殻高32から35㎜程度であり、右殻は殻長37から50㎜程度、殻高30から40㎜程度を測る。

マルヒナガイ

左殻１点が出土し、最小個体数は１個体である。本種は、主に外洋に面した砂質の海底に生息する。破損が著しく計測できない。

アサリ

右殻が１点出土し、最小個体数は１個体である。本種は、主に内湾の干潟や砂浜に生息する。大きさは、殻長35.5㎜、殻高25.8㎜を測る。

アカニシ

１個体が出土している。本種は、主に内湾の砂泥質の干潟などに生息する。大きさは、計測はできないが、標本との比較から、殻高100.0㎜程度と推測される。

ハマグリ

右殻が１点出土し、最小個体数は１個体である。本種は、主に内湾の干潟や砂泥質の海底に生息する。大きさは、破損が著しく計測できないが、手元の標本と比較すると、殻長60㎜程度、殻高50㎜程度と推測される。

オキシジミ

左殻が１点出土し、最小個体数は１個体である。本種は、主に内湾の干潟や砂泥質の海底に生息する。大きさは、殻長34.4㎜、殻高38.5㎜を測る。

５．考　　察

出土した軟体動物は、最小個体数で腹足綱10個体、斧足綱19個体の計29個体を数える。それに対して種数は12科21種にのぼり、少量ずつ多様な種類が出土している。通常、人為的な貝層は、そこに含まれる貝類の種構成が、食料として有用な特定の種に偏る傾向がある。本資料には、一般的には食用にならない種が含まれるだけでなく、食用として重要なアカニシ、ハマグリ、アサリなどが突出することはない。このことから、検出された貝層は、打ち上げられた軟体動物が吹き溜まってできた自然堆積の可能性も考慮する必要があるだろう。

出土した種を、松島義章(1985)の南関東の内湾に生息する軟体動物の分類に従うと、内湾砂底群集や干潟群集に属する種が多く、外海岩礁性群集や内湾岩礁性群集に属する岩礁棲の種が少量出土している(図１)。このような軟体動物相は、同じく大村湾沿岸部に所在する伊木力遺跡でも見られる。本遺跡の軟体動物相は、リアス式海岸が発達する大村湾沿岸の環境を反映している可能性が示唆される。しかし、カブラツキガイについては熱帯性の軟体動物であり、貝層が形成された時の気候が温暖であった可能性を示す。しかし、他地域から搬入され、利用された可能性もあり、花粉分析など、他の

古環境分析の成果と併せて検討する必要がある。

6．まとめ

今回の分析により以下の３点が明らかになった。

（1）全体の最小個体数が腹足綱10個体、斧足綱19個体の計29個体出土し、種数は12科21種にのぼる。多様な軟体動物が少量ずつ出土しており、一般的に食用にならない種も含まれる。このような種構成の貝層は、自然堆積の可能性もある。

（2）出土した軟体動物相は内湾砂底群集、干潟群集に属する種が多く出土し、沿岸岩礁性群集、内湾岩礁性群集などに属する岩礁棲の種が付随的に出土している。

（3）熱帯性のカブラツキガイが出土したことは、当時の気候の温暖さを示すだけでなく、他地域からの搬入された可能性も示唆される。

参考文献

奥谷喬司編2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会1186pp.

奥谷喬司編2005『世界文化生物大図鑑　貝類　改訂版』世界文化社399pp.

川崎　保1990「伊木力遺跡の貝類」『伊木力遺跡－長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査』多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室pp.426-438

松島義章1985「第４章　おぼれ谷の誕生と貝類の区分」『先史時代の自然環境－縄文時代の自然史－』東京美術pp.69-87

---

*i 個体数の算定には最小個体数法を用いた。最小個体数は、基本的に二枚貝は左右のうち出土量が多かった殻頂部の数を、巻貝は殻頂部の数を基にした。しかし、アカニシについてはすべての資料が殻頂部を欠損していたため、内唇部の数を、フトヘナタリ、ヘナタリまたはカワアイ、ウミニナまたはホソウミニナ、カキ類については破損が著しく、かつ破片数で１点ずつしか出土しなかったため、体部破片の数を基に最小個体数を算出した。また、計測は『世界文化生物大図鑑　貝類　改訂版』に従った（奥谷編2005）。

表１　貝津横島Ｂ遺跡出土の貝類遺存体

軟体動物門 MOLLUSKS
- 腹足綱　Gastropoda
  - カサガイ目　Patellogastropoda
    - ユキノカサガイ科 Acmaeidae
      - ヒメコザラ（ヒメコザラ型）*Patelloida pygmaea form heroldi*
  - 古腹足目　Vetigastropoda
    - ニシキウズカイ科 Trochidae
      - シダカガンガラ *Omphalius rusticus*
  - 盤足目　Discopoda
    - ムカデカイ科 Vermetidae
      - オオヘビカイ *Serpulorbis imbricatus*
    - ウミニナ科 Batillariidae
      - フトヘナタリ *Cerithidea alata*
      - ヘナタリ or カワアイ *Cerithideopsilla sp.*
      - ウミニナ or ホソウミニナ *Batillaria sp.*
  - アマオブネガイ目　Neritoida
    - アマオブネガイ科 Neritidae
      - イシマキガイ *Clithon retropictus*
  - 新腹足目　Neogastropoda
    - アクキガイ科 Muricidae
      - アカニシ *Rapana venosa*

- 斧足綱　Bivalvia
  - ウグイスガイ目　Pterioida
    - イタボガキ科 Osteidae
      - カキ類 *Posteridaeb gen. et sp. indet*
      - マガキ *Crassostrea gigas*
  - マルスダレガイ目　Veneroida
    - ツキガイ科 Lucinidae
      - カブラツキガイ *Anodontia edentula*
      - イセシラガイ　*Anodonita stearnsiana*
    - キクザル科 Chamidae
      - キクザル *Chama japonica*
    - ニッコウガイ科 Tellinidae
      - ヒメシラトリ *Macoma incongrua*
    - フナガタガイ科 Trapeziidae
      - ウネナシトマヤガイ *Trapezium liratum*
    - マルスダレガイ科 Veneridae
      - シラオガイ *Circe scripta*
      - ケマンガイ *Gafrarium divaricatum*
      - マルヒナガイ *Dosinorbis troscheli*
      - アサリ *Ruditapes philippinarum*
      - ハマグリ *Meretrix lusoria*
      - オキシジミ *Cyclina sinensis*

表２　貝津横島Ｂ遺跡出土の貝類遺存体

種　　名		NO.	7794	
		試料名	貝津横島Ｂ遺跡	
腹足綱	アカニシ	最小個体数	2	
	ムカデガイ科	最小個体数	-7	
	コシダカガンガラ	最小個体数	1	
	イシマキガイ	最小個体数	1	
	フトヘナタリ	最小個体数	1	
	ヘナタリ/カワアイ	最小個体数	2	
	ウミニナ/ホソウミニナ	最小個体数	1	
	ヒメコザラ（ヒメコザラ型）	最小個体数	1	
小　　計			10	
斧足綱	カブラツキガイ	L/R	1	2
		最小個体数	2	
	イセシラガイ	L/R	1	0
		最小個体数	1	
	オキシジミ	L/R	1	0
		最小個体数	1	
	アサリ	L/R	0	1
		最小個体数	1	
	ケマンガイ	L/R	2	2
		最小個体数	2	
	シラオガイ	L/R	4	4
		最小個体数	4	
	マルヒナガイ	L/R	1	0
		最小個体数	1	
	ハマグリ	L/R	0	1
		最小個体数	1	
	ウネナシトマヤガイ	L/R	0	1
		最小個体数	1	
	ヒメシラトリ	L/R	0	1
		最小個体数	1	
	カキ類	L/R	0	1
		最小個体数	1	
	マガキ	L/R	1	0
		最小個体数	1	
	キクザル	L/R	1	2
		最小個体数	2	
小　　計			19	
総　　計			29	

表３　貝津横島Ｂ遺跡出土の貝類遺存体

種　　名	殻　長	殻　高	殻　長	殻　長
ヒメコザラ	3.45	—	—	—
フトヘナタリ	—	—	—	—
コシダカガンガラ	—	33.99	—	—
イシマキガイ	—	6.48	7.22	—
カブラツキガイ	40.06	(43.25)	31.58	左殻
	(47.39)	43.24	7.4	右殻
イセシラガイ	(54.94)	(57.80)	—	左殻
キクザル	—	45.95	—	左殻
	16.49	22.28	—	右殻
	(34.18)	31.49	—	—
ヒメシラトリ	24.5	14.07	—	右殻
ウネナシトマヤガイ	—	14.13	—	右殻
シラオガイ	34.37	29.86	—	左殻
	43.88	35.49	—	
	34.96	32.6	—	
	—	26.47	—	右殻
	38.18	32.61	—	
	—	28.34	—	
	10.39	11.97	—	
ケマンガイ	—	35.51	—	左殻
	39.53	32.2	—	
	—	39.04	—	右殻
	37.89	30.63	—	
アサリ	35.52	25.81	—	右殻
オキシジミ	34.39	38.45	—	左殻

表４　貝津横島Ｂ遺跡出土貝類生態分類表

水域	沿岸水			内湾水						淡水域
地理的位置	湾の外側			湾口部	波食台	湾中央部		湾奥部	河口	
底質	岩礁	砂泥質	砂質	砂礫質	岩礁	砂質	シルト～泥質	砂泥質	砂泥質	
潮間帯								干潟群集 カブラツキガイ イセシラガイ ウネナシトマヤガイ オキシジミ	感潮域群集 イシマキガイ フトヘナタリ	
上部浅海帯	外海岩礁性群集 ヒメコザラ コシダカガンガラ	沿岸砂底群集 マルヒナガイ ケマンガイ			内湾岩礁性群集 オオヘビガイ マガキ キクザル	内湾砂底群集 ハマグリ アサリ シラオガイ	内湾泥底群集 アカニシ	藻場群集 ヒメシラトリ		

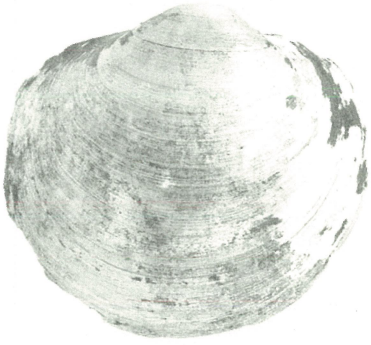
（松島1985をもとに作成）

貝津横島Ｂ遺跡の貝類遺存体

1　アカニシ　1.0cm

2　オオヘビガイ　1.0cm

3　コシダカガンガラ　1.0cm



4　カブラツキガイ（右）　1.0cm

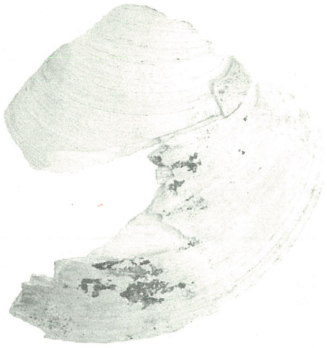
5　イセシラガイ（左）　1.0cm

6　オキシジミ（左）　1.0cm

7　アサリ（右）　1.0cm

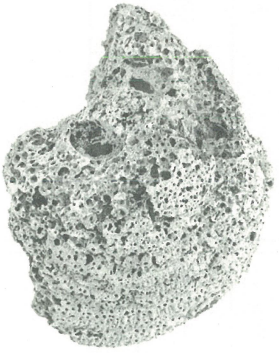
8　ケマンガイ（右）　1.0cm

9　シラオガイ（右）　1.0cm



10　ハマグリ（右）　1.0cm

11　ウネナシトマヤガイ（右）　1.0cm



12　キクザル（左）　1.0cm

図　　版

図版１

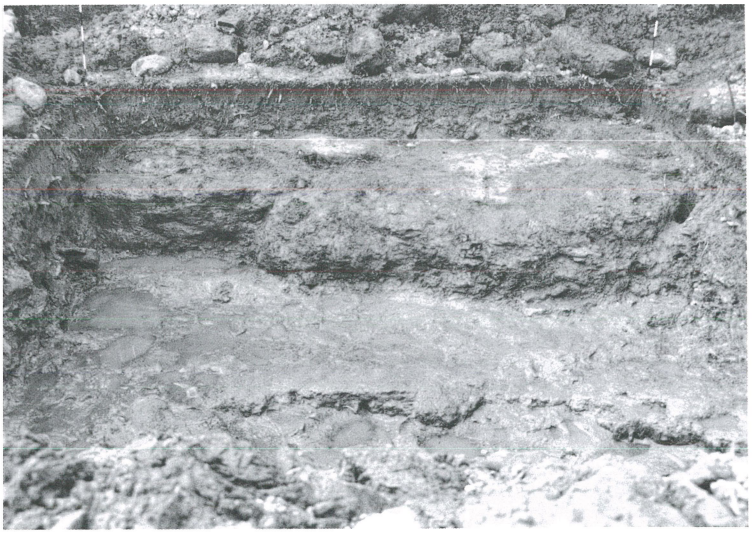
調査地周辺航空写真（平成９年撮影）

調査地遠景（南から）

調査地近景（範囲確認調査前・南から）

図版２

調査地近景（範囲確認調査後・南から）



範囲確認調査１Ｔ　地山検出状況
（東から）

範囲確認調査１Ｔ　東壁（西から）

図版３

範囲確認調査２Ｔ　石列①（北から）

範囲確認調査２Ｔ　石列①（西から）

範囲確認調査４Ｔ　検出状況（南から）

図版４

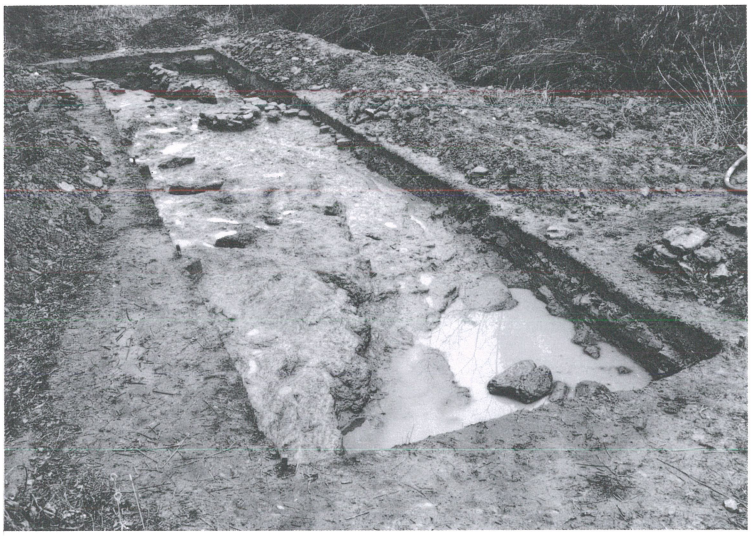
範囲確認調査３Ｔ　検出状況（南から）

遺物出土状況①

遺物出土状況②

図版５

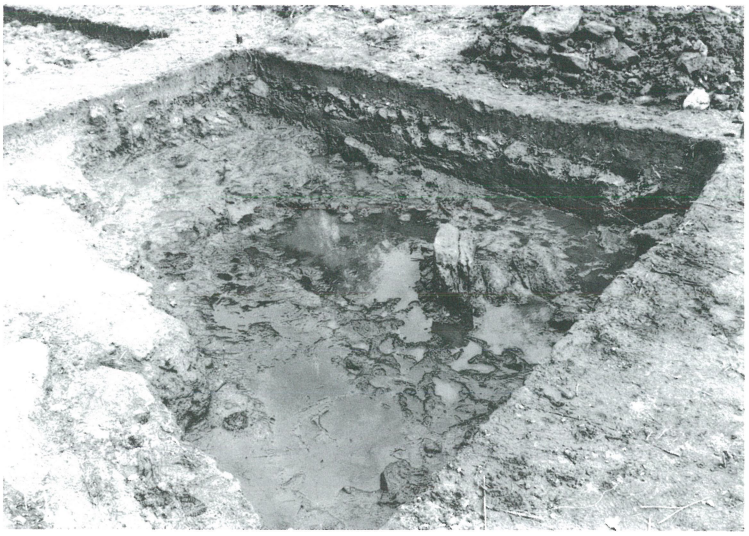
調査地近景（本調査後・南から）



調査地近景（本調査後・南西から）

調査地近景（本調査後・南東から）

図版６



本調査１Ｔ東壁(西から)

３層検出状況①(全景・北から)

３層検出状況②
(本調査１・２Ｔ・北から)

本調査４Ｔ　遺物出土状況（東から）

本調査５Ｔ　石列①（南から）

本調査５Ｔ　石列①（南から）

図版８

本調査５Ｔ　石列①(北から)

本調査３Ｔ　石列②(西から)

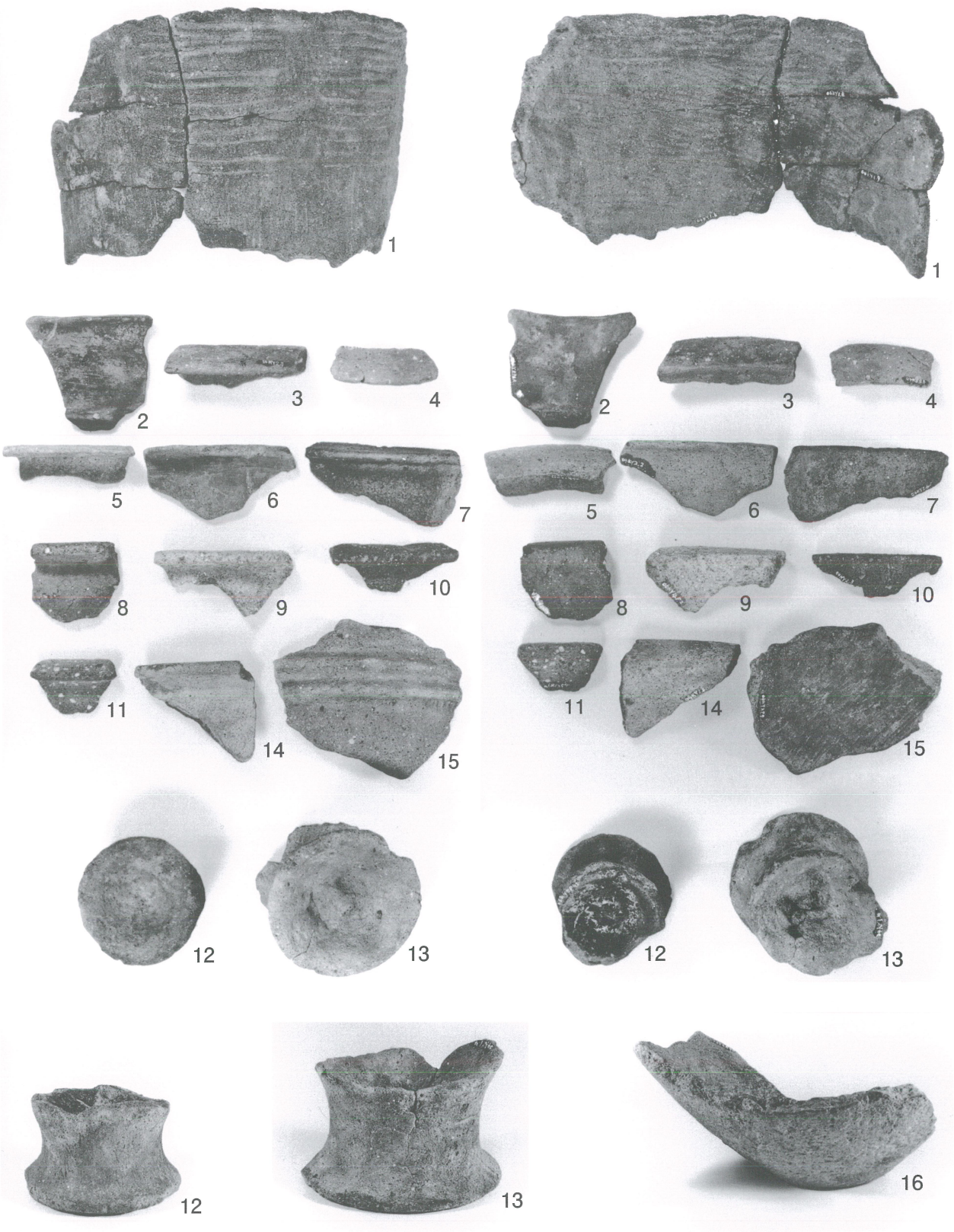
本調査２Ｔ　土壙(北から)

本調査１・２Ｔ　東壁

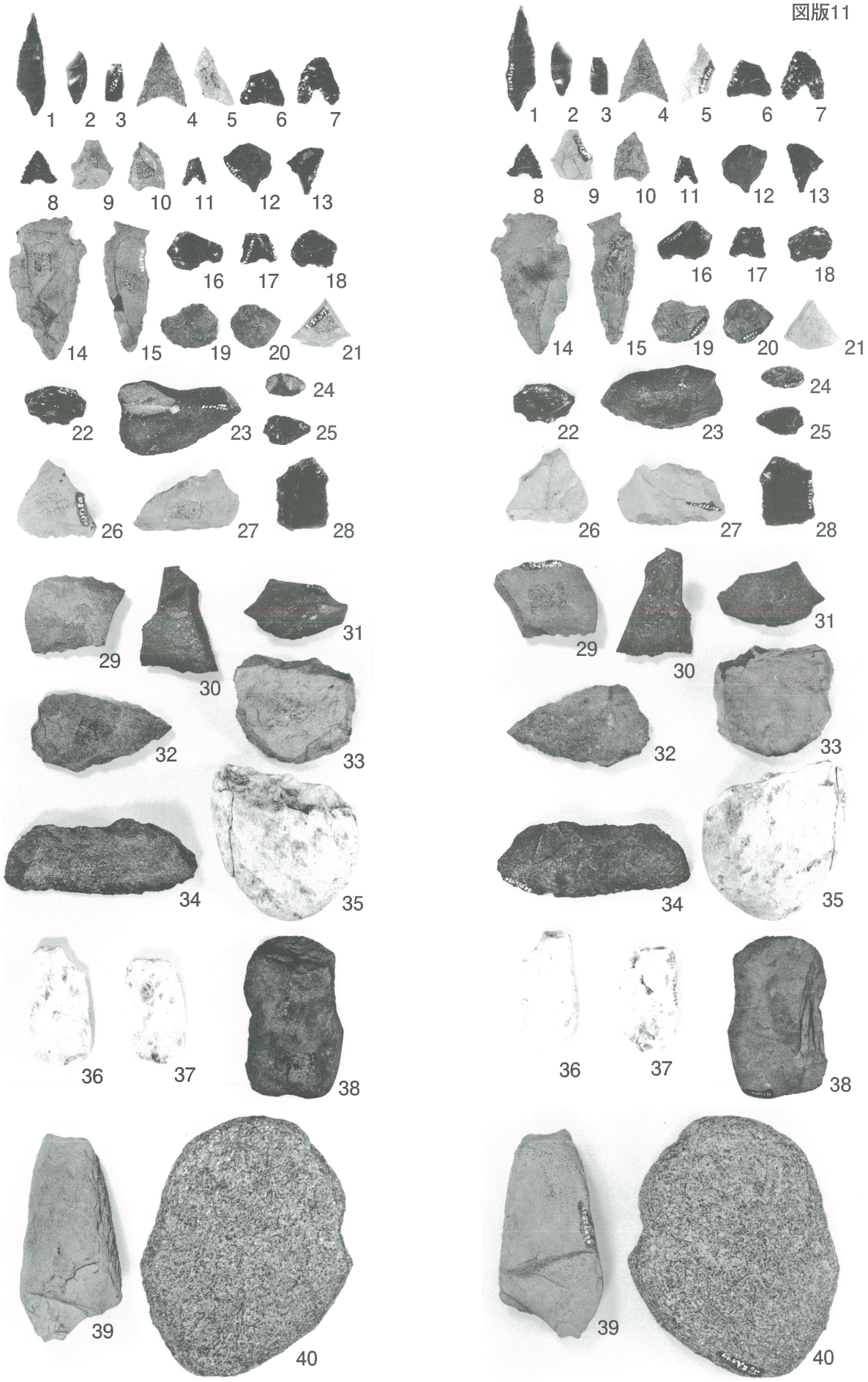
本調査５Ｔ　東壁

作業状況（本調査４・５Ｔ）

図版10



出土遺物①


1 2 3 4 5 6 7
8 9 10 11 12 13
14 15 16 17 18 19 20 21
22 23 24 25
26 27 28
29 30 31
32 33
34 35
36 37 38
39 40
1 2 3 4 5 6 7
8 9 10 11 12 13
14 15 16 17 18 19 20 21
22 23 24 25
26 27 28
29 30 31
32 33
34 35
36 37 38
39 40

出土遺物②

図版12

出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	
書名	貝津横島B遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	諫早市文化財調査報告書
シリーズ番号	第21集
編著者名	川瀬雄一
編集機関	諫早市教育委員会
所在地	〒854-8601 長崎県諫早市東小路町７番１号　TEL0957-22-1500
発行年月日	西暦2008年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かいづよこしま 貝津横島 いせき B遺跡	ながさきけん 長崎県 いさはやし 諫早市 かいづまち 貝津町	42204	84-16	32度 50分 20秒	130度 0分 33秒	範囲確認 調査 2004. 9.14～ 10.18 本調査 2006.11. 2～ 2007. 1.15	150㎡	流通団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
貝津横島 B遺跡	遺物 包含 地	旧石器 縄文 弥生 近世	石列 土壙	縄文土器 弥生土器 石器 近世陶磁器	

諫早市文化財調査報告書　第21集

貝津横島Ｂ遺跡

2008. 3. 31

発行　諫早市教育委員会
〒854-8601　長崎県諫早市東小路町7番1号
TEL（0957）２２－１５００

印刷　真光社印刷
〒859-0312　長崎県諫早市西里町267番地1
TEL（0957）２２－０４７０